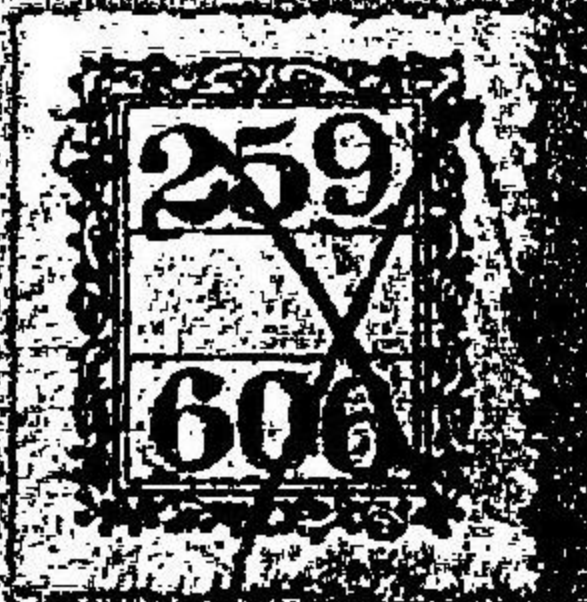


特 71

838



301421-001-1

特 71-838

俳諧三家集

堀野与七

M42.9

DBE-0001





特 71

838

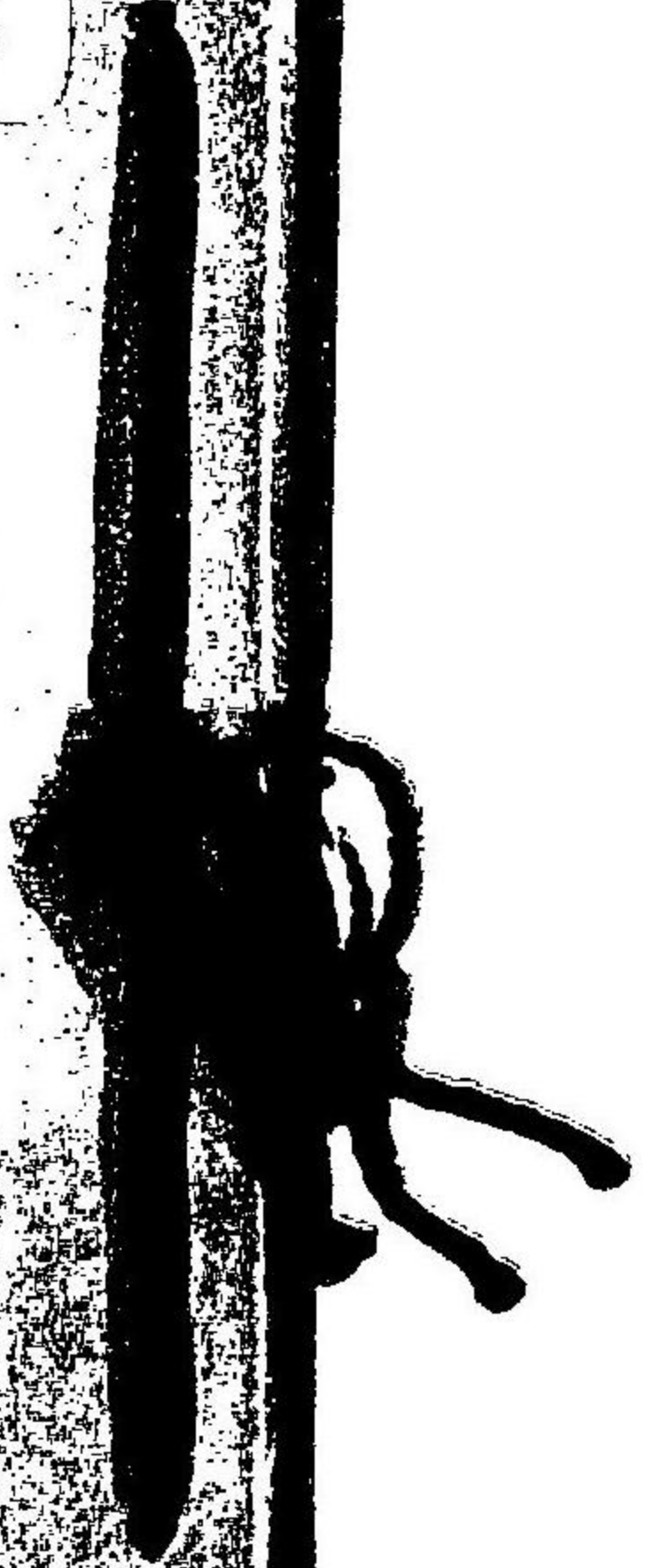
皇清御製  
全書  
五函

皇清御製  
全書

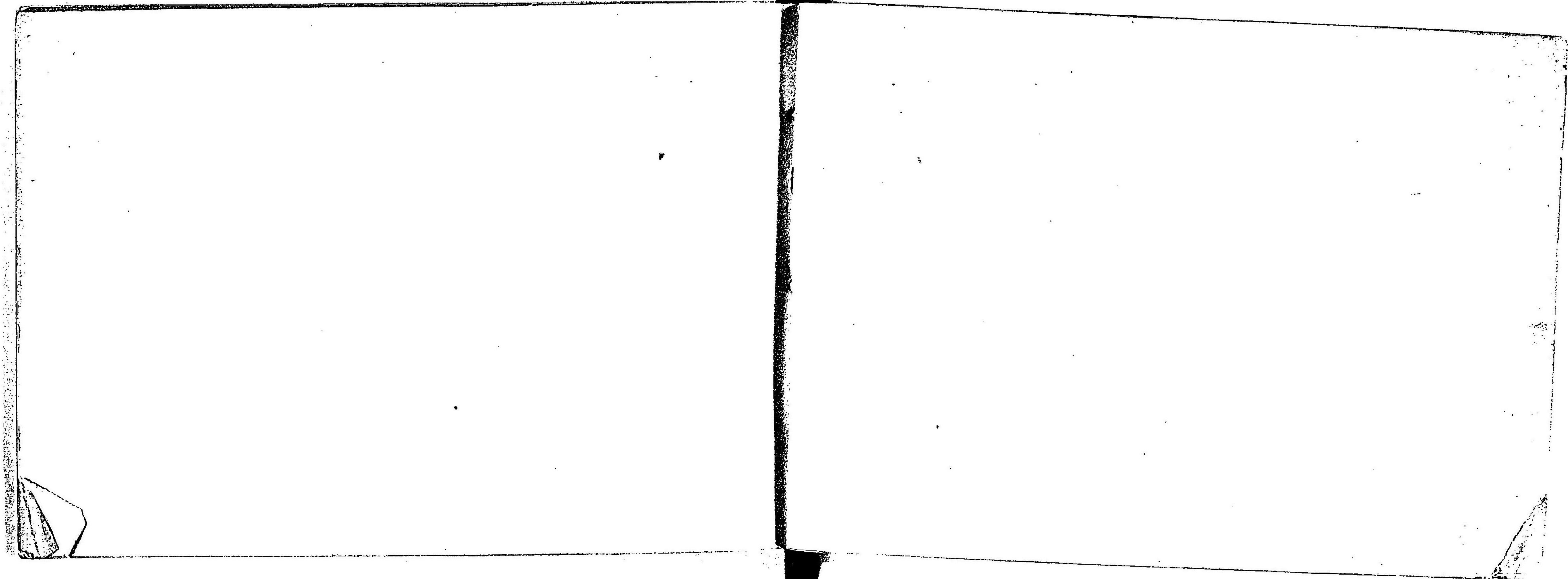
皇清御製

全書

259  
606









謝國瑞

譜往

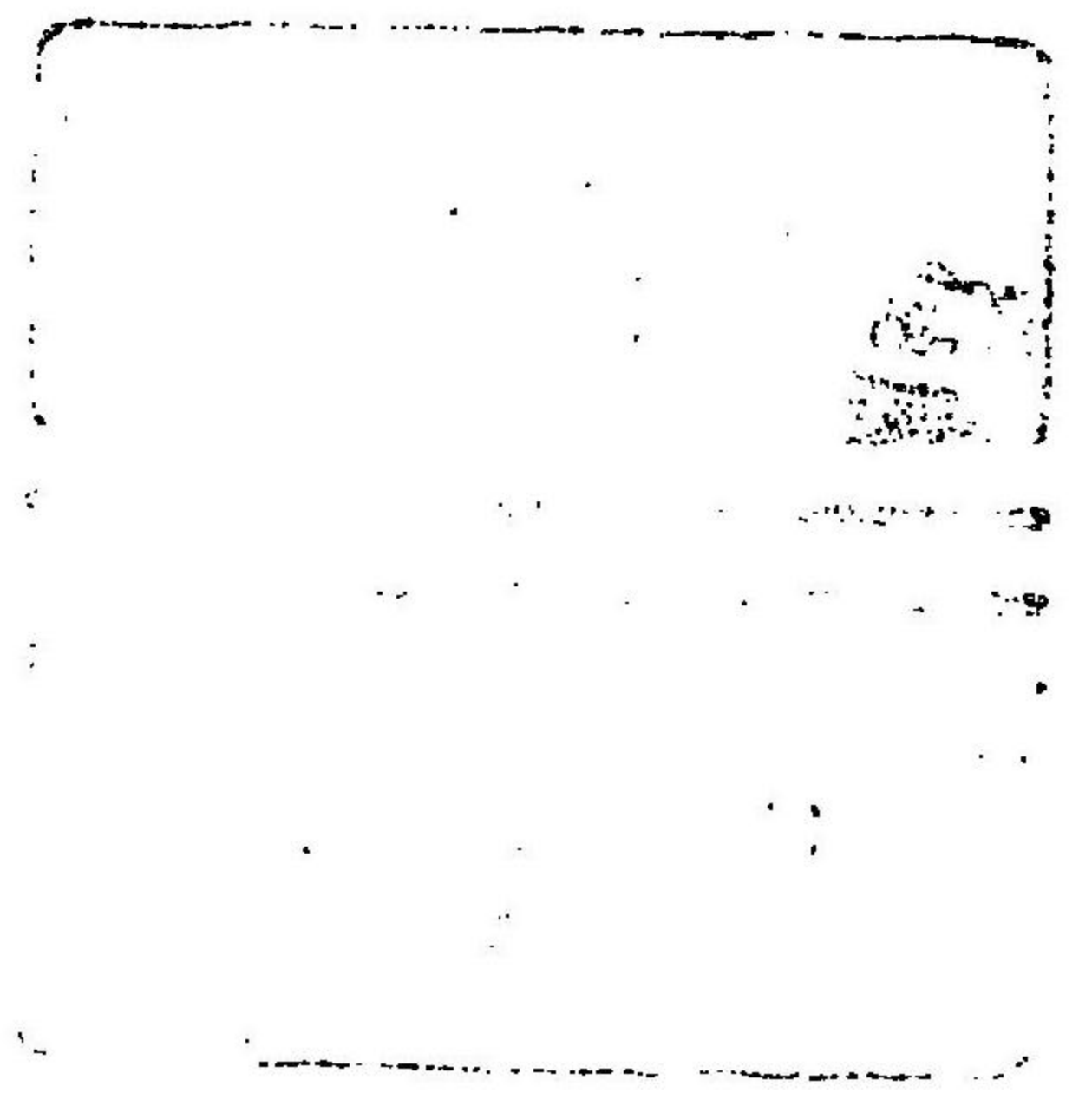
集家

明治  
49 9 15  
慶交

謝國瑞



特71  
A3A



三大家筆蹟

あ  
い  
わ  
な  
ま

あ  
い  
わ  
な  
ま

あ  
い  
わ  
な  
ま

祝



## 凡例

- 一 本書は、芭蕉、蕪村、子規三家の俳句集なるを以て、俳諧三家集と題せり。
- 一 俳諧三家集は、「春夏之部」及び「秋冬之部」の二冊を以て一部となすものにして、本書は其「秋冬之部」なり。
- 一 俳諧三家集は、先づ「秋冬之部」を發刊せりと雖、「春夏之部」も亦引續き直ちに發刊すべし。
- 一 書中、句に句點若しくは黑點あるものは、異本に見えたる句と相違せる點にして、頭部に其相違せる辭句を表はせり。
- 一 俳諧三家集の序文及び詳細なる凡例は、其「春夏之部」に載記したれ共、茲に本書發刊の一斑を記す。希くは「春夏之部」と併せ覽て、發刊の主旨及び眞價を



評し玉へ。

一本書編纂より發刊に到るまで、朱泉、飽瓜兩君の助力せられたる所多し。茲に記して之を謝す。

四十二年立秋の日

疎山記

### 俳諧三家集目次

#### 秋之部

##### 天文

初月	一
二日月	一
三日月	一
五日月	二
星月夜	二
宵月夜	二
待宵	三
月	三
名月	三
今日の月	三
月今宵	三
月見	三
雨の月	四
十六夜	四
下弦	四
後の月	五
十三夜	五

豆名月	一六
名残の月	一六
笹の月	一六
銀河	一六
初風	一七
秋の風	一七
野分	一七
稻妻	一七
秋日影	一七
秋日和	一七
秋の霞	一七
秋晴	一七
秋高	一七
秋澄	一七
秋の空	一七
秋の色	一七
秋の聲	一七
律の調	一七
霧	一七
秋時雨	一七
秋雨	一七

##### 時候

立秋	一八
----	----



秋に入.....三  
 来る秋.....三  
 初秋.....三  
 今朝の秋.....三  
 浦の秋.....三  
 須磨の秋.....三  
 江戸の秋.....三  
 鹿の秋.....三  
 文月.....三  
 盆過.....三  
 二百十日.....三  
 秋の夕.....三  
 秋の暮.....三  
 秋の夜.....三  
 夜長.....三  
 殘暑.....三  
 秋暑.....三  
 秋涼.....三  
 冷か.....三  
 身に入む.....三  
 秋汗.....三  
 秋寒.....三  
 うそ寒.....三  
 肌寒.....三

地理

初寒.....二〇  
 漸寒.....二〇  
 夜寒.....二〇  
 行秋.....二〇  
 秋深.....二〇  
 暮の秋.....二〇  
 九月盤.....二〇  
 秋惜.....二〇  
 冬近.....二〇  
 冬待.....二〇  
 秋の山.....二一  
 花野.....二一  
 秋の野.....二一  
 穂田.....二一  
 刈田.....二一  
 秋の水.....二一  
 秋の海.....二一  
 初潮.....二一  
 露.....二一  
 露時雨.....二一  
 秋の霜.....二一

人事

七夕.....三  
 鼠祭.....三  
 鼠合.....三  
 鼠の別.....三  
 鼠の糸.....三  
 鼠の葉.....三  
 鼠の橋.....三  
 鼠の池.....三  
 盆會.....三  
 魂祭.....三  
 魂棚.....三  
 生身魂.....三  
 魂迎.....三  
 迎火.....三  
 送火.....三  
 盆燈籠.....三  
 草市.....三  
 柳燈籠.....三  
 高燈籠.....三  
 切子燈籠.....三

盆提燈.....三  
 廻燈籠.....三  
 大文字火.....三  
 施餓鬼.....三  
 廻施餓鬼.....三  
 掘待.....三  
 術突入.....三  
 踊.....三  
 角觥.....三  
 子供角觥.....三  
 地取.....三  
 花火.....三  
 兩國川開.....三  
 後殿入.....三  
 秋彼岸.....三  
 地藏會.....三  
 駒迎.....三  
 伊勢遷宮.....三  
 升市.....三  
 城南寺祭.....三  
 牛祭.....三  
 神田祭.....三  
 秋祭.....三  
 八朔.....三







流柿	100	紫苑	101
栗	100	萱草	101
栗飯	100	秋海棠	101
桃の實	100	雞頭花	101
梨の實	100	雁來紅	101
柘榴	100	蘭	102
蜜柑	100	菊	102
柚子	100	白菊	102
無花果	100	野菊	102
棗	100	萩	102
銀杏	100	萩	102
銀杏實心	100	芒	102
銀杏落葉	100	花芒	102
藤の實	100	尾花	102
椎の實	100	我亦紅	102
圓栗	100	葛	102
榎の實	100	角觥草	102
橡の實	100	水引草	102
棕の實	100	曼珠沙華	102
迎春	100	白粉花	102
梅	100	檀特花	102
朝顔	100	草花	102
桔梗	100	稻の花	102
女郎花	100	稻	102

稻刈	117	絲瓜	112
晚稻刈	118	西瓜	112
掛稻	118	西瓜燈籠	112
稻扱	118	烏瓜	112
稻越	118	冬瓜	112
稻舟	118	南瓜	112
落穂	118	半	112
早稻	119	半の子	112
新穀	119	芋の葉	112
粟	119	薯蕷	112
蕎麥の花	119	零餘子	112
蕎麥	119	苺	112
蓮の花	119	半	112
大麥の花	119	蜀黍	112
麻	119	苧	112
苧の花	119	初非	112
苧	119	菜非	112
苧紅葉	119	松露	112
萩	119	非	112
芭蕉	119	松非	112
破芭蕉	119	松非飯	112
取荷	119	非	112
迷安飛	119	枝豆	112
瓢	119	薯蕷	112



鬼燈……………一五  
 野菓予……………一五  
 草の質……………一五  
 結 核……………一五  
 結……………一五  
 若草……………一五  
 掛煙草……………一五  
 末 枯……………一五  
 秋雜……………一五

冬之部

天文

冬 空……………一五  
 冬日影……………一五  
 冬の月……………一五  
 寒 月……………一五  
 初時雨……………一五  
 時 雨……………一五  
 冬の雨……………一五  
 寒の雨……………一五  
 初 雪……………一五  
 雪……………一五  
 雪 見……………一五  
 深 雪……………一五  
 大 雪……………一五  
 雪 待……………一五  
 雪 園……………一五  
 雪の園……………一五  
 雪 空……………一五  
 雪 穢……………一五  
 雪の花……………一五

時候

雪 女……………一五  
 雪 野……………一五  
 雪の原……………一五  
 雪 折……………一五  
 雪丸げ……………一五  
 吹 雪……………一五  
 霽……………一五  
 氷 枯……………一五  
 北 風……………一五  
 今朝の冬……………一五  
 冬に入る……………一五  
 立 冬……………一五  
 初 冬……………一五  
 冬の日……………一五  
 冬の夜……………一五  
 寒 夜……………一五  
 寒……………一五  
 寒 さ……………一五  
 冷たさ……………一五  
 凍……………一五



露凍る	一六二
月凍る	一六三
雪	一六三
雪	一六三
冬ざれ	一六四
冬枯	一六四
小春	一六五
小六月	一六五
神無月	一六六
霜月	一六六
冬至	一六七
次郎月	一六八
師走	一六八
年の暮	一六九
行年	一六九
春待	一七〇
年浪	一七〇
大晦日	一七一

地理

水溜	一六三
冬田	一六三
冬の川	一六三
冬木立	一六四
枯野	一六四
冬野	一六四
初霜	一六五
霜	一六五
霜夜	一六五
霜柱	一六五
霜枯	一六五
初氷	一六六
氷	一六六
氷柱	一六七
露凍る	一六七

人事

冬	一六二
冬	一六二
山	一六三
山	一六三

神の旅	一六三
神の留守	一六三
神送	一六四
神迎	一六四
天長節	一六四
送唐忌	一六五

芭蕉忌	一六二
蕪村忌	一六三
御命講	一六三
十夜	一六四
御取越	一六四
御講	一六五
夷講	一六五
御火焚	一六六
耶蘇祭	一六六
髪区	一六七
表配	一六七
顔見世	一六八
雄魚練	一六八
掛乞	一六八
鉢藏	一六九
寒念佛	一六九
寒垢離	一七〇
寒聲	一七〇
節季候	一七一
姥杵	一七一
厄拂	一七二
蒲團	一七二
灸	一七三
毛布	一七三

紙子	一六二
綿子	一六三
冬服	一六三
二重履	一六四
足袋	一六四
手袋	一六五
襪	一六五
頭巾	一六六
冬帽子	一六六
綿帽子	一六七
爐開	一六七
圍爐裏	一六八
火桶	一六八
火鉢	一六八
炬燵	一六九
煖爐開	一六九
煖爐	一七〇
煖爐	一七〇
湯婆	一七一
埋火	一七一
火事	一七二
炭	一七二
炭	一七三
炭	一七三
炭	一七三











嵐蘭初七日慕參

見しやその七日は慕の三日の月 芭蕉  
 三日月や名のなき山も三笠山 同  
 鳥盡てかくるゝ弓か三日の月 兼村  
 妙義峨々と聳えて三日の月細し 子規  
 所化二人鐘撞き習ふ三日の月 同  
 夕風や三日月見ゆる船の窓 同  
 五日月 同

妹の歸るおそさよ五日月 同  
 星月夜 同

紅ゐの燈火高し星月夜 同  
 古庭の白菊白し星月夜 同  
 三尺の庭へ出て見つ星月夜 同  
 何もなき島をありく星月夜 同  
 星月夜一つも星のとはぬ哉 同  
 首出すや夜舟の窓の星月夜 同  
 ちよぼくと黒さけ村か星月夜 同  
 星月夜星を見に行く岡の茶屋 同  
 花取に海の名問ふや星月夜 同  
 禪寺の門を出づれば星月夜 同  
 木によれば枝葉まばらに星月夜 同  
 舟過ぐる水の光や星月夜 同  
 宵月夜 同  
 見る影やまた片形も宵月夜 芭蕉  
 宵 蕉

片敷

待宵

待宵や松に音して初嵐 同  
 待宵や女主に女客 兼村  
 待宵の晴れ過ぎて扱あした哉 子規  
 月 同

月をしるべこなたへいらせ旅の宿 芭蕉  
 月を佗身を佗拙きを佗てわ 同  
 ふとこたへんとすれと問人 同  
 もなし猶わひくて 同

佗ひてすめ月佗齋が奈良茶歌 同  
 佗ひてすめ月佗笠の窓を家として 同  
 實にや月間くち千金の通町 同  
 延寶四辰桑名氏の催しに 同

なかめるや江戸にはまれば山の月 同  
 小夜の中山 同  
 馬に寐て残夢月遠し茶の烟 同  
 神路山 同

三十日月なし千里の杉を抱く嵐 同  
 川舟やよい茶よい酒よい月夜 同  
 古將監か古實を語て 同  
 月やその鉢の木の日の下而 同  
 鹿島にて 同

月早し梢は雨をもちながら 同  
 あの中に蒔繪書たし宿の月 同

松み



姨捨山にて

あもかけや姨一人なく月の友 世 蕪  
我宿は四角なかけを窓の月 同

善光寺

月かげや四門四宗も唯ひとつ 同  
湯の尾

月に名をつしみかねてやいもの神 同

燧か山

義仲の寐覺の山か月悲し 同

元祿二年つるがの湊に月を

見て氣比の明神に詣遊行上

人の古例を聞

月清し遊行のもてる砂の上 同

仲秋の夜敦賀に宿りぬ主の

物語に此海に鐘の沈みて侍

るを國の守のあまを入て尋

させ給へど龍頭下さまに落

て引上べき便もなしと聞て

月いづこ鏡は沈める海の底 同

斜嶺亭

戸を開けは西に山有伊吹と

云花にもよらず雪にもよら

す只孤山の徳あり

其儘に月もたのまじ伊吹山 同

悼遠流天宥法印

其靈を羽黒にかへせ法の月 同

伊賀又玄か宅にて

月さひよ明智か妻のはなしせん 同

正秀亭初會

月代や膝に手を置く宵の宿 同

消息

水油なくて寐る夜や窓の月 同

山寒し心のそこや水の月 同

柴の庵と聞はいやしき名を

れども世にこのもしき名に

そありける

柴の戸の月やそのまゝあみだ坊 同

旅窓長夜

九度起ても月の七つかな 同

蟻虫庵にて

今よひ誰よし野の月も十六里 同

柱は杉風枳風か情を削住居

は曾良俗水か物好を佗猶名

月のよそほひには芭蕉五も

とを裁たり

芭蕉葉を柱にかけん庵の月 同

深川の末五本松といふ所に

舟をさして

月さびて

十六夜



川上と此川下や月の友 芭蕉

東順老人湖上に生れて東野  
に終をとれり

入月のあとは机の四隅哉 同

畦山亭題月下送兒  
月すじや狐怖かる兒の供 同

玄柳亭にて

秋もはやはらつく雨に月の形 同

月澄て秋は入日のあとのふし 同

また明ぬこゝろはいかに窓の月 同

越人へ

男ふり水呑顔や秋の月 同

武藏野の月の若生や松島の種 同

石山秋月

汐やかぬ須磨よ此湖秋の月 同

衣着て小貝拾はん色の月 同

あすの月雨占はん比那が島 同

越の中山

中山や越路の月は又命 同

國々や八景更に氣比の月 同

長柄埋木の文臺の裏書に

月の洩る昔の橋の板目哉 同

盃に月を碎くや夜もすがら 同

松島の月見ぬ人やうつせ貝 同

蕪村

三井寺や月の詩作る踏落し 同

庵の月主をとへば芋掘に 同

水の月やよ望に降る雪かよ 同

月天心貧しき町を通りけり 同

五六升芋煮る坊の月夜かな 同

山の端や海を離るゝ月も今 同

悼

秋の月古文臺にむかひしも 同

所思

宗祇我を戀と夜眉毛に月の露を貫く 同

となせの瀧

水一筋月よりうつす桂河 同

唐山水

興つきた雪にもこりす月の友 同

良夜とふかたもなきに訪來

る人もなければ

中々にひとりあれはぞ月を友 同

鯉長か酔るや崑崙として玉

山のまさに崩れんとするか

如し其係今尙眼中に在て

月見ればなみだに碎く千々の玉 同

待戀

月に來よと只去氣なく書送る 子規

月一輪星無數空みどりなり 同



或月夜路通惟然に語るらく 子規

愚庵十二勝の内嘯月壇

嘯けば月あらはるゝ山の上 同  
珍らしや初て見たる月の富士 同

議論

驛の一人月にぞ向ひける 同  
月高く木にあり下は水の音 同  
杉暗し月にこぼるゝ井戸の水 同  
月さすや几帳の上の眉ばかり 同  
藍色の海の上なり須磨の月 同  
月の根岸間の上野や別れ道 同  
山既に月を吐くべき景色哉 同  
山寺や松ばかりなる庭の月 同  
野の中や只一本の杉の月 同  
芒活け芋盛りて月未だ出でず 同  
縁側の芋に湯氣立つ月夜哉 同  
笛賣の笛吹く月の夜店かな 同  
月の秋典津の借家尋ねけり 同  
笛の音や遠くに見ゆる月の人 同  
此波は須磨へつゝか三津の月 同  
浮世より外の浮世や水と月 同  
日蝕 二句  
日と月と重なり合うて晝暗し 同  
日蝕に満月の裏を見られける 同

舟一つ通るや月を碎く音 同  
汽車の窓にさし込む須磨の月夜哉 同  
月落る波止場の外の果もなし 同  
書に見ゆる長者の跡や草の月 同

進軍歌

進めく角一盤月上りけり 同  
野に山に進むや月の三萬騎 同  
岩崎の横町さびし塚の月 同  
船と出て月に散歩す遊女町 同

凱歌

月千里馬上に小手をかざしけり 同  
砲やんで月醒し山の上 同  
行きくれて大根畑の月夜かな 同

借

月見るやきのふの花に出家して 同  
月もなし圓通堂の歌の會 同

奈良

月上る大佛殿の足場かな 同  
夕月や又此宿も酒わろし 同  
月も見えず大きな浪の立つことよ 同  
夕月や内陣に人の籠る音 同  
鎌倉や島の上の月一つ 同

陰曆八月十七日元光院

ある僧の月も待たずに歸りけり 同



月白もなくて月出る野末哉 子規

琵琶一曲月は鴨居に隠れけり 同

元光院 二句

山麩に木魅答へて杉の月 同  
月の出をかう見よと坊は建たらん 同

名月 武藏守泰時仁愛を先とし政は  
慾を去を以て先とすとあり

名月の出るや五十一ヶ條 世蕉  
重々ど名月の夜や茶臼山 同

敦賀夜泊

名月や北國日和さためなき 同

名月や兒達ならぶ堂の縁 同

名月や湖水にうかぶ七小町 同

名月は二つあつても瀬田の月 同

書題

夏かけて名月あつき涼み哉 同

名月や鶴脛たかき遠干潟 同

名月やわれを簞架の影法師 同

名月や我家にもとる門徒坊 同

深川

名月や門にさし来る沙頭 同

善光寺

明月や四門四宗も只ひとつ 同

月影

伊賀山中にて

名月の花かと思えて綿はだけ 同

名月に麓のきりや田のくもり 同

名月や池をめぐりて夜もすがら 同

名月や西にもほしき窓一つ 同

等裁に尋ねあひて

名月の見所問ん旅寐せん 同

名月やたしかにわたる鶴の聲 同

名月や鼻の先なる光明寺 同

名月や今朝見た人に行違ひ 同

名月や秋月殿の艦 同

名月に糸のころ捨る下部かな 同

名月や雨をためたる池の上 同

名月や夜は人住ぬ峰の茶屋 同

名月や兎の渡る諏訪の海 同

名月や露にぬれぬは露ばかり 同

雨のいのりのむかしを思て

名月や神泉苑の魚躍る 同

木犀の香や明月は曇りけり 子規

名月のうしろに高し箱根山 同

名月や真向に立ちし鹿の形 同

名月や京の乞食は歌よまん 同

名月やます穂の芒風もなし 同

明月の豆盗人を照しけり 同

名月や下部どし



名月や枝豆の林酒の池 子規  
名月や白き鳥飛ぶ海の上 同  
名月や野に面す樓の謠會 同

今日の月

木を伐つてもと口見はや今日の月 芭蕉

義仲寺にて

三井寺の門叩はや今日の月 同

靈岩島の人來るに三人皆七

兵衛といふに戯れて

盃に三ツ名をくむ今日の月 同

滄海の波酒くまし今日の月 同

たんだ住め住めは都を今日の月 同

歌器の圖に題す

あと先を思へば淋し今日の月 同

花守は野守に劣る今日の月 蕪村

番屋ある村は更たり今日の月 同

盗人の首領歌よむ今日の月 同

仲丸の魂祭せむ今日の月 同

かつまたの池は闇なり今日の月 同

良夜

櫻なきもろこしかけて今日の月 同

傘張の願も同じ今日の月 子規

どの松にかけて眺めん今日の月 同

月今宵

月今宵主の翁まひ出てよ 蕪村

月今宵松にかへたるやどり哉 同

月見

月今宵宵突當りわらひけり 同

雲をりく人を休る月見哉 芭蕉

座頭かと人に見られて月見哉 同

鹿島根本寺

寺に寝てまこと顔なる月見哉 同

田家

すりかけて

賤の子や稻すりわけて月を見る 同

月見よと

月見せよ玉江の芦を刈らぬ光 同

浅水の橋をわたる俗にあさ

うつといふ清少納言の橋は

と有一條あさむつのと書る

所とを

明月や

朝むつや月見の旅の明はなれ 同

古寺翫月

月見する座に美しき顔もなし 同

米呉るゝ友を今よひの月の客 蕪村

身の闇の頭巾も通る月見かな 同

月の宴秋津か聲の高きかな 同

梨の木に倚てわびしき月見かな 同

月見舟煙管を落す淺瀬かな 同

一行に繪かきも交る月見哉 子規



かけ椀を敲く乞食の月見哉 子規  
やみになる観月會の手紙哉 同  
寺に待つ観月會の車かな 同  
御寺より月見の芋をもらひけり 同  
羊羹に限ある下戸の月見哉 同

達磨の讃

兎角して九年の月見友もなし 同  
小淋しき月見の窓や雨曇 同

元光院

月曇る観月會の終りかな 同

雨の月

かつら男すまじなりけり雨の月 芭蕉

濱

月のみか雨に角力もなかりけり 同

探題雨月

旅人よ笠島かたれ雨の月 蕉村

雨多き年や月見も雨にして 子規

句と案ず蒲團の中や月の雨 同

雨に寐て夢に晴けり今日の月 同

月の雨團子を喰うて將基哉 同

十六夜

十六夜もまた更科の郡哉 芭蕉

打出の濱にて

十六夜や海老煮る程の宵の闇 同

海老煮る

堅田十六夜

鎖明て月さし入れよ浮御堂 同

やすくと出ていさよふ月の雲 同

十六夜はわづかに闇のはじめ哉 同

十六夜や鯨来そめし熊野浦 蕉村

十六夜の雲吹去ぬ秋の風 同

名月も十六夜も皆雨にして 子規

下 弦

二十日過出るや名残の三日の月 芭蕉

いさゝかなる所に旅立て舟

の中に一夜を明し曉の空落

より顔をさし出して

明ほのや

明行くや二十七夜も三日の月 同

後の月

物識の心とひたし後の月 同

仲秋の月は更科の里娘捨山

に慰めかねて猶哀れさの目

にも離れずなから長月十三

夜になりぬ

木曾の瘦も未だ直らぬに後の月 同

後の月鴨立つあとの水の中 蕉村

後の月賢き人そとふ夜かな 同

鯉煮る宿にとまりつ後の月 同

山茶花の木の間見せけり後の月 同



三井寺に綴子の夜着や後の月 蕪村  
水洞て池のひつみや後の月 同  
十月の今宵はしくれ後の月 同

十三夜の月を賞することは  
我日のもとの風流なりけり

唐人よ此花過ぎて後の月 同  
仲秋の韻をたしむや後の月 子規  
後の月芒の白髪梳りあへず 同  
後の月つくねんとして庵にあり 同

十三夜

泊る氣てひとり來ませり十三夜 蕪村

豆名月

枝豆は喰ひけり月は見ざりけり 子規  
枝豆の売捨てに出る月夜哉 同  
枝豆や月は糸瓜の棚にあり 同

名残の月

石山に詣ける道

橋桁のしのふは月の名残哉 世無  
盆の月 子規

穢多村や犬の皮剥く盆の月

銀・河

水學ものり物かさん天の川 世無  
荒海や佐渡に横たふ天の川 同  
菊川に公卿衆泊けり天の川 蕪村

桑名より宮へ七里や天の川 子規

天の川敵陣下に見ゆるかな 同

川上は東と見えて天の川 同

海原や空をはなる天の川 同

卷き落す浪のかしらや天の川 同

山の温泉や裸の上の天の川 同

野の宮やものはなれて天の川 同

たてかけし杉の丸太や天の川 同

復道や銀河に近き灯の通ひ 同

膳所越て湖水に落ぬ天の川 同

行きく／＼て左になりぬ天の川 同

北國の庇は長し天の川 同

三尺の幅とこそ見れ天の川 同

天の川山なき國の眞上哉 同

夜涼如水天の川邊の星一つ 同

初風

一輪の薔薇吹き散りぬ初嵐 同

秋の風

蜘蛛何と音を何となく秋の風 芭蕉

秋風のやり戸の口やとかり聲 同

憐捨子

猿を聞く人捨子に秋の風いかに 同

義朝のこゝろに似たり秋の風 同

秋風や葦も鳥も不破の關 同



身にしてみても大根からし秋の風 芭蕉

秋風の吹けとも青し栗の穂 同

一笑進善

塚もうちけ我泣聲は秋の風 同

途中

あか／＼と日はつれなくも秋の風 同

那谷観音にて

石山の石より白し秋の風 同

贈桃天號

桃の木其葉ちらすな秋の風 同

宇治の中村といふ所にて

秋の風伊勢の葛原猶すこし 同

人の短を言ふ事なかれ我長

を説くことなかれ

物いへは唇さむし秋の風 同

暮秋のけしきを

秋風や桐に動いて蕙の霜 同

伊勢紀行の跋

西ひがしあはれさ同じ秋の風 同

悼松倉嵐蘭

秋風に折れてかなしき桑の杖 同

野水が旅行を送る

見送りのうしろやさむし秋の風 同

牛部屋に蚊の聲弱し秋の風 同

桐動い秋の風  
りや  
蕙の霜

暗き殘暑哉

や／＼秋風吹とはせ松の村紅葉 同

松植て竹のほしさよ秋の風 同

鶉つかひの佐兵衛一昨夜相

果候と承る

鶉の背の肌を刺すらん秋の風 同

題書屏

君も臣もうさにはたへね秋の風 同

秋風にちるや卒塔婆の匏屑 蕪村

秋風や酒肆に詩うたふ漁者樵者 同

書譜

秋風の再び倒す隙子かな 同

秋の風書むしはまらずなりにけり 同

秋風や干魚かけたる濱鹿 同

金屏の羅は誰か秋の風 同

かなしきや釣の糸ふく秋の風 同

唐黍のおとろきやすし秋の風 同

おもひ出て酔作る僧よ秋の風 同

硝やこれも猶秋の風 同

秋風や生きて相見る汝と我 子規

秋風や旅の浮世の果知らず 同

道後公園

水草の花また白し秋の風 同

秋風や侍町は塚ばかり 同

秋風や小牛ひきこむ家二軒 同

江池々



大佛の大き知れず秋の風 子規  
旅の旅の其又旅の秋の風 同  
そよ／＼と入日の面を秋の風 同

貧家の圖に  
泣く母も笑ふ其子も秋の風 同  
馬下りて川の名問へは秋の風 同  
秋風に櫻咲くなり法經華寺 同

日蝕  
お日様を虫か喰ひけり秋の風 同  
さらば君あすはいづくの秋の風 同  
何とせん母瘦せ給ふ秋の風 同

青樓  
骸骨と我には見えて秋の風 同  
淋しさや嵐のあとの秋の風 同

絶戀  
讀み返す文の中より秋の風 同  
糸瓜ぶらり夕顔だらり秋の風 同  
夕顔の太り過ぎたり秋の風 同

水澤を出て東京に向ふ  
背に吹くや五十四郡の秋の風 同  
町川に鯿釣る人や秋の風 同  
須磨寺  
秋風も平家弔ふ經の聲 同  
秋風やつるりとしたる富士の山 同

秋風や覺束なくも時鳥 同  
人間はどまた生きて居る秋の風 同

題拂子  
馬の尾に佛性ありや秋の風 同  
秋風や絲瓜の花を吹き落す 同

詩竹山人の松島行を送る  
歌は古し詩て白河の秋の風 同  
生き残る藪蚊鋭し秋の風 同

湯田温泉  
秋風や人あらはなる山の宿 同  
船よする築島寺や秋の風 同

出征  
秋風や馬合點して北の方 同  
元光院  
三十六坊一坊残る秋の風 同

野分  
猪もともに吹かるゝ野分哉 芭蕉  
吹き飛ばす石も淺間の野分哉 同

粟津晴嵐  
さそ野分人の淡たつ市の聲 同  
穂芒に思ふ儘なる野分哉 同  
鳥羽殿へ五六騎急く野分哉 蕪村  
底のない桶こけありく野分かな 同  
野分やんで鼠のわたる流かな 同



船頭の棹とられたる野分かな 蕪村  
 岡の家の海より明て野分かな 同  
 まつ二つ瓦ふくもの野分かな 同  
 門前の老婆子薪食る野分哉 同  
 棒突て庄屋殿見舞野分かな 同  
 鴻の巢の網代にかゝる野分かな 同  
 麓なる我菴麥存す野分哉 同  
 山賊のさとしてすぐる野分かな 同  
 曉の屋根に矢の立つ野分かな 同  
 恙なき帆柱寐せる野分かな 同  
 客僧の二階下り来る野分哉 同  
 關の灯をともしせば滅る野分かな 同  
 西須磨を通る野分の且かな 同  
 妻も子も寺でもの食ふ野分かな 同  
 市人のよべ間かはす野分かな 同  
 心細く野分のつものる日暮哉 子規  
 大佛のなびくかと思ふ野分哉 同  
 乞食の吹きまくらるゝ野分哉 同  
 山鳥の尾を吹かれたる野分哉 同  
 野分して蟬の少なき朝哉 同  
 宗鑑の生草かぢる野分かな 同  
 雲らぎれ雲とび野分雨も降らず 同  
 三日月の吹きとられたる野分哉 同  
 見に行くや野分のおとの百花園 同

雞頭は二尺に足らぬ野分哉 同  
 雞頭のまだいとけなき野分哉 同  
 雞頭の皆倒れたる野分哉 同  
 雞頭は杖を力に野分かな 同  
 杉の木のためみ見て居る野分哉 同  
 野分して上野の鶯の庭に来る 同  
 野分の夜書讀む心定まらず 同  
 野分少しやんで雞なく夜明哉 同  
 方十町砂糖木畑の野分哉 同  
 起せども野分の芒たあいなき 同  
 寺あれて釣鐘のこる野分哉 同  
 堀こけて家あらはなる野分哉 同  
 人がやく土堀を起す野分哉 同  
 此野分更にやむべくもあらぬ哉 同  
 銀杏の青葉吹き散る野分哉 同  
 芒伏し裁折れ野分止みにけり 同

なかりけり

暗にけり

稲妻

寄季下

稲妻を手にとる關の紙燭哉 芭蕉  
 宿救賀

あの雲は稲妻を待つたより哉 同  
 或智識の曰なま禪大疵のも  
 とゐとかやいと有かたくて  
 稲妻に悟らぬ人の尊さよ 同

尊さよ



粟津にて

稻妻や湖の面をひらめかす 芭蕉

本間主馬宅にて

稻妻や顔の所かすしきの穂 同

稻妻や闇のかた行く五位の聲 同

粟津にて

稻妻や縁まで来ては返る浪 同

稻妻の一網うつや伊勢の海 兼村

稻妻や秋津島根のかゝり舟 同

稻妻や浪もてゆへる秋津島 同

稻妻にこぼるゝ音や竹の露 同

稻妻や佐渡なつかしき舟便り 同

稻妻や堅田泊りの宵の空 同

鎌倉にて

稻妻や二打三打 劔澤 同

かな河浦にて

稻妻や八丈かけてさくた摺 同

稻妻に金屏たしむ夕かな 子規

稻妻や狸のふくり牛の角 同

稻妻の蚊屋をすかして黄色なり 同

夜や更けん稻妻白き森の隙 同

稻つまの雲をはなれぬ月夜哉 同

稻つまや森の隙間に水を見たり 同

稻つまに露の散る間もなかりけり 同

茶色なり

さくたより

二折三折

稻妻や横幅廣く折れて出る 同

稻妻や盃の底の忘れ水 同

稻妻や三井から見れば瀬田の上 同

竹を伐つて稻妻近き夜となりぬ 同

稻光り芒の上を走りけり 同

稻妻や燈臺番の妻一人 同

稻妻の遠くに光る月夜かな 同

稻妻や足場かけたる藏の間 同

稻妻のひらめく水の映り哉 同

町を出て稻妻廣し森の上 同

稻つまのする時雲のかたち哉 同

稻妻の木かくれなりぬ森に入る 同

稻妻や飛魚とんで海くらし 同

稻妻の世を觀ずらし大佛 同

稻妻や一本杉の右左 同

秋日影 同

行船や秋の日遠くなりまざる 兼村

大根の二葉に秋の日さし哉 子規

西へまはる秋の日影や絲瓜棚 同

秋の日の薄雲かくれ触すなり 同

秋日和 同

鳥海にかたまる雲や秋日和 同

軍艦を見に行く人や秋日和 同

秋の雲 同



秋の雲流をはなれて山の上  
砂の如き雲流れ行く朝の秋  
子規

秋晴

秋晴れて青く小さき筑波哉  
秋晴れて鎌の光の山に来る  
秋晴れて浅雲閣の人小さし  
秋晴れてものゝ煙の空に入る  
秋晴れて遠足の人蟻の如し  
秋晴れて敷浪雲の平なり  
秋晴るゝ松の梢や鷺白し  
時雨に遠く小春に近く秋晴れぬ  
秋晴れて埃のやうな蟲の飛ぶ  
病人の駕で遊ぶや秋の晴

秋高

秋高く象潟はれて鶴一羽  
秋高き椎の梢に日蝕せり  
秋高き天文臺のともし哉

秋澄

秋すむや貝鏡響く峯の雲  
秋澄たり魚水中に浮て底の影

秋の空

蝶鳥の知らぬ花あり秋の空  
秋の空昨日や鶴を放ちたる  
秋の空雲重なつて暮れにけり  
芭蕉  
子規

秋の暮

大水の引て雨なし秋の空  
秋の空清水流るゝ思ひあり  
椎の木を伐り倒しけり秋の空  
秋の空浅雲閣に人見ゆる  
舟もなき川の廣さや秋の空  
秋の空青菜車のつゝきけり  
秋の空露をためたる青さ哉  
鵬よりも鷺よりも高し秋の空

秋の色

庵にかけんとて句空が書か  
せける兼好の繪に

秋の色糖味噌壺もなかりけり  
芭蕉

秋の聲

宇治行  
舟を裂く琵琶の流や秋の聲  
蕪村

律の調

幸崎夜雨  
琵琶の湖雨と疎顔が松の律  
芭蕉

霧

於君崎  
松なれや霧をいさらえいと引程に  
甲州産屋ヶ崎  
雲霧の暫し百景を盡しけり  
霧時雨富士を見ぬ日と面白き  
同  
同

雲霧に



越後國能生神社沙路之名鐘

曙や霧にうつまく鐘の聲 芭蕉  
 朝霧や村千軒の市の音 蕪村  
 人を取る淵はかしか霧の中 同  
 朝霧や杭打の音丁々たり 同  
 朝霧や書に書く夢の人通り 同  
 霧はれて高砂の町まのあたり 同  
 霧晴るゝ田の面や鷺に旭の當る 子規  
 山霧の奥も知られず鳥の聲 同  
 旅籠屋や霧晴れて窓に富士高し 同  
 朝霧の垂するなり大師堂 同  
 朝霧の中に九段のともし哉 同  
 曉の霧しづかなり中禪寺 同

最上川

朝霧や舟かゝり居る裏戸口 同  
 朝立や主従と見えて霧の中 同  
 廻廊や霧よきめくる巖島 同  
 茶屋あらはに燈火立つや霧の中 同  
 樵夫二人だまつて霧を現はるゝ 同  
 山檜に朝霧かゝる峠かな 同  
 木曾川  
 朝霧や四十八瀧下り舟 同  
 朝霧や起きて飯炊く弟子大工 同  
 見ゆるべき御鼻も霧の十八里 同

くさび打つ音の高さよ霧の中 同  
 霧はれて雲とよ山のくぼみ哉 同  
 夜霧罩めて赤き灯見ゆる郭哉 同  
 北海や日蝕見えす晝の霧 同  
 秋の時雨  
 昨日からちよつくと秋も時雨哉 芭蕉  
 秋もはや日和しぐるゝ飯時分 子規

秋 雨  
 秋雨や水底の草踏みわたる 蕪村  
 秋雨や我菅笠は未だぬらさじ 同  
 色さめし秋海棠や秋の雨 子規  
 杉くらく鴉なくなり秋の雨 同  
 長眠十一時間  
 晝までも灯のともりけり秋の雨 同  
 柴又の寺を出づれば秋の雨 同  
 秋雨や水さびのたまる庭の池 同  
 紫陽花や青にさまりし秋の雨 同  
 追込の小鳥静まる秋の雨 同



時候

立 秋

秋立つや何に驚く陰陽師 蕪村  
秋立つや素湯香しき施薬院 同  
照る雨や我に秋立つ思ひあり 同  
秋立つ日鳥に魚をとられけり 子規

須磨

秋立てば淋し立たねば暑苦し 同

最上川

秋立つや出羽商人の最合舟 同  
秋立つと夏嫌ひの人申しけり 同  
荒駒の足落付て秋の立つ 同  
秋立つとさやかに人の目さめけり 同  
白雲に秋立てはまた地は曇し 同

庭前

白き花赤き花秋立ちにけり 同

秋に入る 草花を畫く日課や秋に入る 同

来る秋 秋來にけり耳を尋ねて枕の風 芭蕉

秋來ぬと妻乞ほしや鹿の皮 同  
夕かほやかいははるほど秋は來ぬ 同  
秋來ぬと合點させたる噓かな 蕪村  
來る秋や昔に近き須磨の浦 子規  
秋來ぬと柱の拂子動きけり 同  
是見たか秋に追はるうしろ影 同

初 秋

鳴海眺望 二句

青田の

初秋や海も青田も一みとり 芭蕉  
初秋は海やら田やらみとり哉 同  
初秋や曇みなからの蚊屋の夜着 同  
初秋や余所の灯見ゆる宵の程 蕪村  
初秋や合歡の葉越しの流れ星 子規

王子権現

初秋の石段高し杉木立 同

碧梧桐虚子を伴ひて

初秋や三人連だちてそこらあたり 同

今朝の秋

猫に見えけり 服ぬきの猫にも知るべし今朝の秋 芭蕉  
汗拭を下女にとらせけり今朝の秋 同  
今朝の秋朝精進のはしめかな 蕪村  
女郎花二もと折りぬ今朝の秋 同  
硝子の魚驚きぬ今朝の秋 同



うちはして燈消したり今朝の秋 蕪村

病起

蚊帳越しに鬼を管うつ今朝の秋 同

貧乏に遣つかれけり今朝の秋 同

温泉の底に我足みゆる今朝の秋 同

さぬくの言葉すくなよ今朝の秋 同

今朝の秋昨日のものをとられけり 子規

乞食や揃うて見たる今朝の秋 同

西吹くと水士のいふなり今朝の秋 同

浦の秋 芭蕉

夜歩行にから糖の音や浦の秋 同

須磨の秋 同

見渡せば詠むれば見れば須磨の秋 同

秋の須磨須磨や秋なる夢日和 同

須磨寺にて 蕪村

笛の音に浪も寄り来る須磨の秋 子規

来て見れば風が吹くなり須磨の秋 同

蛸干して鳥追ふ蟹や須磨の秋 同

須磨の秋金持らしき家見ゆる 同

江戸の秋 同

上野着 同

みちのくを出て賑はしや江戸の秋 同

庵の秋 同

草廬 同

藏澤の竹も久しや庵の秋 同

賑かに暮るゝ日もあり庵の秋 同

文月 同

直江津 同

文月や六日も常の夜には似ず 同

盆過 同

盆過の月明かに雨の音 同

二百十日 同

嵐雪か四國にわたる時 同

旅からす二百十日も船支度 芭蕉

日の照りて風吹く二百十日哉 子規

芒の穂二百十日も過ぎにけり 同

こけもせて二百十日の雞頭哉 同

稻正に二百十日の花ぐもり 同

わが脊戸に二百十日の茄子哉 同

休暇盡きて二百十日の船出哉 同

秋の夕 同

水流れ雲行く秋の夕かな 同

聲なり秋の夕のわたし守 同

王子 同

杉高く秋の夕日の茶店かな 同

夕飯の灯をともしけり寺の秋 同

婆々か来てひとす秋の夕哉 同

秋の暮 同



雪の旅それらてはなし秋の暮 芭蕉

六助六兵衛の二人に芭蕉庵  
を訪はれて故郷の安否を聞

幾千里へたつ思ひや秋の暮 同  
愚案するに冥途もかくや秋の暮 同

木因亭

死にもせぬ旅寝の果よ秋の暮 同  
枯枝に鳥のとまりけり秋の暮 同

深川の庵

棹郎の尻聲寒し秋の暮 同  
雲竹自書像

こちら向け我もさびしき秋の暮 同  
所思

此道や行人なしに秋の暮 同  
人聲や此道かへる秋の暮 同

秋の暮客か亭主か中柱 同  
松杉の尾上の鐘や秋の暮 同

蝶鳥の知らぬ花あり秋の暮 同  
門を出て故人にあひぬ秋の暮 同

門を出れば我も行人秋の暮 同  
鳥さしの西へ過けり秋の暮 同

灯ともせと言ひつゝ出るや秋の暮 同  
人は何に化るかも知らし秋の暮 同

秋の暮辻の地藏に油さす 同

秋の空

弓取に歌とはれけり秋の暮 同  
淋しさの嬉しくもあり秋の暮 同  
限りなき命のひまや秋の暮 同  
淋し身に杖忘れたり秋の暮 同

老懷

去年より又淋しいを秋の暮 同  
父母の事のみ思ふ秋の暮 同  
訓讀の經をよすかや秋の暮 同  
秋の暮佛に化ける狸かな 同  
一人来て一人を訪ふや秋の暮 同

猿丸太夫讚

我がてに我を招くや秋の暮 同  
あちらむきに鳴も立たり秋の暮 同  
古里や都見て来て秋の暮 子  
山門をぎいと鎖すや秋の暮 規  
看經や鉦はやめたる秋の暮 同  
順禮は花のうてなと歌ひ絶秋の暮 同  
順禮の御詠歌たうと秋の暮 同

留別

十一人一人になりて秋の暮 同  
まし事の相手に秋の日暮たり 同  
思ひ切て見れば見る程秋の暮 同  
女郎買をやめて此頃秋の暮 同  
秋の暮案山子にかゝる鳴子繩 同

冬の月







蟬鳴いて残暑の頭裂くる思ひ 子規

裏窓に西日さし込む残暑哉 同

松風の價をねさる残暑かな 同

病人に八十五度の残暑かな 同

書門を鎖す残暑の裸哉 同

紫茉莉の花に残暑の日影哉 同

晝過の町や残暑の肴賣 同

掘風呂に残暑の垢のたまりけり 同

日他

日の神も御病氣とやら此残暑 同

砂濱や残る暑さをほのめかす 同

栗川來ぬ年は五穀豊饒なり

とかや

絲瓜には可も不可もなき残暑哉 同

水産博覽會

残暑の繼夜寒の鮭と相識らず 同

温泉に三度残る暑さも晝の内 同

腹中に残る暑さや二萬巻 同

秋 暑

神鳴のなれとも秋の暑さ哉 同

秋 涼

ある草庵にいさなはれて

秋涼し手毎にひげや瓜茄子 芭蕉

冷 か

家康の魂ひやくかに杉木立 子規

曉の冷かな雲流れけり 同

日他

冷かや喰はれ残りの日の光 同

尻のあとの最う冷かに古壘 同

杉をもる日ひやくかに曾我の墓 同

身に入む

江上の破屋を出るとて

野さらしを心に風の入む身哉 芭蕉

身に入むや亡妻の櫛を間に踏む 芭蕉

身に入むや横川のきぬをすすす時 同

秋 冴

秋冴たり我鯉きらん水の色 子規

秋 寒

三井の山上より三上山を望

みて

秋寒し藤太が縮ひゆく時 芭蕉

澁柿は澁にとられて秋寒し 子規

秋寒し眼の光る鬼女の面 同

うそ寒

ひらりしやらり一葉揺てうそ寒し 同

うそ寒や綿入着たる小大名 同

肌 寒

温泉の名残今宵は肌の寒からん 芭蕉







大寺のともし少なき夜寒哉 子規  
 狼の人食ひに出る夜寒哉 同  
 刃物置いて盗人防く夜寒哉 同  
 吉原の仁輪加過ぎたる夜寒哉 同  
 夜寒さや家なき原に灯のともる 同  
 盗人を柱に縛す夜寒かな 同  
 鼠狩れば鼠の笑ふ夜寒哉 同  
 犬が来て水のむ音の夜寒かな 同  
 腹にひびく夜寒の鐘や法隆寺 同  
 勤行のすんで灯を消す夜寒哉 同  
 牧師一人信者四五人の夜寒哉 同  
 化けさうな行燈に寺の夜寒哉 同  
 三厘の風呂出て風ひく夜寒哉 同  
 汽車に寝て須磨の風ひく夜寒哉 同  
 出女が風ひき聲の夜寒哉 同  
 だまされてわるい宿とる夜寒哉 同  
 蚊屋釣らて書美人見ゆる夜寒哉 同  
 松明に落武者さがす夜寒哉 同  
 霽月軒  
 夜寒さや人静まりて海の音 同  
 船に寝て行李を枕の夜寒哉 同  
 首途の用意して寐る夜寒かな 同  
 鼻たれの兄と呼はるゝ夜寒哉 同  
 奈良角定にて

大佛の足もとに寐る夜寒哉 同  
 母と二人妹を待つ夜寒哉 同  
 油さしに禿時間ふ夜寒哉 同  
 虫の音の小なくなりし夜寒哉 同  
 おもてから見るや夜寒の最合風呂 同  
 須磨

行 秋

蕎麥は有ど夜寒の温餠さこしめせ 同  
 須磨寺の門を過ぎ行く夜寒哉 同  
 蜘蛛すあとの淋しき夜寒哉 同  
 地震して温泉涸れし町の夜寒哉 同  
 行 秋  
 行秋や身に引まどふ三布蒲團 芭蕉  
 行秋や手をひろげたる栗の毬 同  
 行秋の猶たのもしや青みかん 同  
 旅の物うさも未だやまざる 同  
 に長月六日になれば伊勢の 同  
 遷宮舞まむと又舟にのりて 同  
 蛤のふた見に別れ行秋を 同  
 行く秋の處々や下り築 燕村  
 行く秋やよき衣きたる掛り人 同  
 行く秋を糸瓜にさはる雲もなし 子規  
 行秋の鴉もとんでしまひけり 同  
 行秋の野菊白くも咲きけらし 同  
 行秋のふしづくいたむ旅寝哉 同



行秋を時雨れかけたり法隆寺 子規  
 行秋の鐘つき料を取りに来る 同  
 行秋や吊られて下る唐辛子 同  
 行秋を佛手柑の唯ひとつ哉 同  
 秋行くと砂糖木畑の荒にけり 同  
 行秋の我に神なし佛なし 同  
 秋 深

芝柏亭

秋深き隣は何をする人ぞ 芭蕉

暮の秋

懷老杜

風露を

露風を吹て暮秋歎ずるは誰が子ぞ 同  
 清水の茶店に遊ぶ

秋の暮

松風の軒をめぐりて秋暮ぬ 同  
 いさゝかな償乞はれぬ暮の秋 同  
 跡かくす師の行方や暮の秋 同

ある方にて

暮の秋有職の人は宿に在す 同  
 月もあり黄菊白菊暮るゝ秋 子規

九月盡

易を點して兌の卦に至り九月盡 同  
 晝中や石に虫なく九月盡 同

秋 惜

戸を叩く狸と秋を惜みけり 蕪村

冬 近

洛東芭蕉庵にて

冬近し時雨の雲もこしよりぞ 蕪村  
 我庵は蚊屋に別れて冬近し 子規  
 冬近し今年は露を蓄へし 同

冬 待

冬待つや兵どもの皮衣 同

羽簪五徳など書きたるに

冬待つや寂然として四疊半 同



地理

秋の山

幻住庵にて

旅瘦や寝冷わつらふ秋の山 芭蕉  
 道盡きて雲起りけり秋の山 子規  
 大方はすしきなりけり秋の山 同  
 山門を出て下りけり秋の山 同  
 右も三井左も三井秋の富士 同  
 行先のはつきり遠し秋の富士 同  
 面白やどの橋からも秋の富士 同  
 秋は山は盡は白壁夜は燈 同  
 高樓や我を取巻く秋の山 同  
 秋の山北を固めの砦かな 同

花野

松明消えて海すこし見ゆる花野哉 蕪村  
 傘をすぼめて通る花野哉 子規

秋の野

秋の野や草の中ゆく水の音 芭蕉  
 秋の野や鳥うたんとて行く袂 蕪村

稽田

稽田に紅葉ちりかゝる夕日哉 同  
 稽田や瘦せて慈姑の花一つ 子規

刈田

田家

刈りかけし田面の鶴や里の秋 芭蕉  
 ところ／＼菜鳥青き刈田哉 子規

秋の水

田に落て田を落行くや秋の水 蕪村  
 日蝕や蓋をして置く秋の水 子規  
 日蝕のうつりて凄し秋の水 同  
 翡翠の来らずなりぬ秋の水 同  
 秋の水石白く魚動かざる 同  
 南泉の猫斬り捨てし秋の水 同  
 石塔の沈めるも見えぬ秋の水 同  
 蝶鯉浮いて鯉深く沈む秋の水 同  
 静かさに礫うちけり秋の水 同

秋の海

門を出て十歩に秋の海廣し 同  
 底見えてうろくつ居らす秋の海 同  
 ながくと安房の岬や秋の海 同  
 秋の海我船近き岩に鳥 同  
 出羽  
 夕陽に馬洗ひけり秋の海 同  
 秋の海渺々として鳥孤なり 同



那古寺の縁の下より秋の海  
秋の海名もなき島のあらはるゝ  
大岩の穴より見ゆる秋の海  
子規

初潮

初沙や朝日の中に伊豆相模  
初沙に追れて登る小魚かな  
初潮や海ゆりこして草の上  
子規  
初沙の上に灯ともす小島哉  
同  
初沙に松四五本の小島哉  
同  
初沙やはかなきものはうつせ貝  
同  
初沙や川に漂ふこも包み  
同  
初潮や阜頭の内なる蒸汽船  
同  
初沙や千石船の船よそひ  
同

露

芳野西行庵にて

露とくく試みに浮世すゝがばや  
芭蕉

書證

西行の草鞋もかゝれ松の露  
同  
會良にわかる  
けふよりや書付けさん笠の露  
同  
二見の浦  
硯かといろふやくぼさ石の露  
同  
一草庵の席上麩應を制して  
白露のさびしき味を忘るゝな  
同

乳母草を誰結べとや朝の露  
賤の宮森の露ちる旭かな  
同

宮部丹後近々旅より歸ると  
さして

草の戸や時へも露の待ち設  
朝露やまだ霜知らぬ髪不落  
紅の露折くべる御垣守  
同  
白露や茨の刺にひとつづい  
同  
白露や家こぼちたる萱の上  
同  
舍利となる身の朝起や草の露  
同

狐の法師に化けたる書に贊  
を乞はれて

白露の身や葛の葉の裏借家  
殿原のいつち急ぐぞ草の露  
同  
掛稻のそら解けしたり草の露  
同  
篠懸や露に聲あるかけはづし  
同  
狩倉の露に重たき靴かな  
同  
鍋釜もゆかしき宿や今朝の露  
同  
市人の物うち語る露の中  
同  
白露の篠原へ出る檜原かな  
同  
白露やさつその胸毛ぬるゝほど  
同  
ものゝの露はらひゆく胸かな  
同  
白露に家四五軒の小村哉  
子規  
富士は雲露に明行く裾野哉  
同



曉の骨に露置く焼塙かな 子規  
 星一つとんとて音あり露の原 同  
 白露の美し過ぎて散りにけり 同  
 草の露馬も夜討の仕度かな 同  
 露夜毎殺生石を洗ひけり 同  
 風吹いて京も露けき夜なりけり 同  
 白露や朝顔は世に長きもの 同  
 草むらや露暖かに温泉の流れ 同  
 露いくつ絲瓜の尻に出逢ひけり 同  
 蓬生や我 頬 走る露の玉 同  
 白露や三河島村灯ちら／＼ 同  
 白露の中に泣きけり祇王祇女 同  
 白露の中にぼつかり夜の山 同  
 大佛も鐘もぬれたり森の露 同  
 草の露夜舟をあかる草履哉 同  
 獵人も犬もぬれたり草の露 同  
 丁堂和尚より南岳の百花繪  
 巻を贈られて  
 草花帖我に露ちる思ひあり 同  
 猪や一ふり振ふ朝の露 同  
 今朝の露ゆふへの雨や屋根の草 同  
 顔見えて野武士火を焚く露の中 同  
 植木屋の夜店の跡や道の露 同

草庵

一升の露をたしふる小庭哉 同  
 火葬場の灰に置きけり露の玉 同

賀仕官

雲の上露の世界を忘るゝな 同  
 藁沓や庭に山路の露を印す 同

春日社

灯ともすや露のしたゝる石燈籠 同  
 馬の尾の露をはね行く野道哉 同

元光院

瓶花露をこほす琵琶三兩曲 同

露時雨

露時雨蜜柑の色にしみたらず 芭蕉

秋の霜

母の白髪を拜みて 芭蕉

手にとらば消ん涙をまつき秋の霜 芭蕉  
 秋の霜うち平めなる石の上 蕉村



人事

七夕

月弓や婿の一藝男たなはた  
たなばたの逢はぬ心や雨中天

芭蕉

何かしの御代官に隨身して  
四國へ赴く人に

七夕やはたか硯のにはか旅  
七夕や秋をさだむるはじめの夜

何

七夕は鶯の聲にて明けにけり  
七夕の橋やくづれてなく鴉

子規

星祭

合歡の木の葉こしもいと入星の影  
素堂の母七十あまり七とせ

芭蕉

の秋七月七日にことよきす  
るに萬葉の七くさをもて題

とす是につらなるもの七人  
此結縁にふれて各又七更の

七株の萩の手本や星の秋

同

大雨星

高水に星も旅寝や岩の上  
星合の中やたへなん龍田川

同

星合は月落ち鳥鳴いて夜半  
星の別  
曉の静かに星の別れかな  
もふくと牛なく星の別哉

子規

願の糸  
戀さまく願の糸の白きより

同

梶の葉  
梶の葉を朗詠集の葉かな

同

鵲の橋  
橋もなし鵲とんで仕舞けり

同

机硯洗  
門川や机洗ふ子五六人  
物洗ふ七夕川のさわきかな

同

十年の硯洗ふ事もなかりけり  
洗ひたる机洗ひたる硯かな

同

盆會

奈良の片腦の里にありて

盂蘭盆や家の裏とふ墓參  
聖靈の寫眞に憑るや二三日

芭蕉

魂祭



蓮池や折らて其儘魂まつり 芭蕉

加賀の國を過る

熊坂がゆかりやいつの魂祭 同

鳥部山

魂まつりけふも焼塙の畑哉 同

壽貞尼身まかりけると聞て

數ならぬ身とな思ひを魂祭 同

草庵

稻の穂の露ばかりなる玉祭 同

魂祭王孫いまだ歸り來ず 蕪村

徹書記がゆかりの宿や魂祭 同

あぢきなや蛸の裾踏む魂祭 同

草の戸や月明かに魂祭 子規

魂棚

魂棚をぼとけはもとの座敷かな 蕪村

生身魂

魂棚の飯に露置く夕かな 子規

生身魂

生身魂七十と申し達者なり 同

魂迎

生身魂其又親も達者なり 同

魂迎

太紙か一周忌に 蕪村

魂かへれ初裏の月のあるじなら

迎火

魂かへれ初裏の月のあるじなら 蕪村

迎火

迎火や墓は故郷家は旅 子規

送火

撫子に迎火うつる小庭かな 同

送火

送火や今宵定むる嫁もある 同

鳥帽子

鳥帽子着て送火たくや白拍子 同

墓參

甲戌の秋大津に侍りしをこ 同

のかみの許より消息せられ

ければ舊里に歸りて盆會を

營むとて

家ばみな世に白髪の墓參 芭蕉

家族従者十人ばかり墓參 子規

柵經

柵經や小僧面白さうに讀む 同

草市

草市の價安くてあはれなり 同

賣れ残る菰は露なり草の市 同

草市の蓮にたまる埃かな 同

草市や雨にぬれたる蓮の花 同

草市や燈籠白き夕まぐれ 同

草市の草しほみたる日向かな 同

草市や人まばらなる宵の雨 同

草市の草の匂ひや廣小路 同

草市の中を葬禮通りけり 同

草市や柳の下の燈籠店 同



燈籠

秋夜閑窓のもとに指を屈し  
て世になき友を算ふ

無村

燈籠を三度かかげぬ露ながら  
淋しさは燈籠がけたる三階哉  
里川や燈籠さげてわたる人  
垣ごしに見ゆる隣の燈籠哉  
吉原の燈籠見による酒の酔  
たをやめの足元くらき燈籠哉  
しよんぼりと燈籠白し草の奥  
燈籠をともして留守の小家哉  
朝顔の彩色うすき燈籠哉  
亡き妻や燈籠の陰に榻をつかひ  
燈籠さけて橋行く人や水の影

賀卒業

燈籠の主か達者て居られたら  
燈籠を得値切らぬもあはれなり

同

高燈籠

高燈籠消きなんとするあまたいび  
高燈籠總檢校の舟の宿  
日の入るや星のあたりの高燈籠  
瘦村のひつそりとして高燈籠  
灯や消えし雲やかいりし高燈籠

無村  
同  
子規  
同  
同

切籠

しだり尾の切籠かけたり宵の秋  
磯多村に消え残りたる切籠かな  
家の内に切籠をともす嵐哉

無村  
同  
子規

盆提燈

骸骨の讚

夕風や盆提燈も糊はなれ

芭蕉

廻燈籠

同じ事を廻燈籠の廻りけり

子規

大文字

相阿彌の宵寐起すや大文字  
十六日の夕加茂の邊に遊ぶ

蕪村

大文字やあふみの空もたゞならぬ  
夜の露もえて音あり大文字

子規

施餓鬼

水の音施餓鬼涼しき燈影哉  
門前の川に灯ともす施餓鬼哉  
朝顔の盛り過ぎたる施餓鬼哉  
夜更て施餓鬼の燈籠流しけり  
施餓鬼舟はや龍王も浮ぶべし  
鱸施餓鬼

同  
同  
同  
同  
同

松山木屋町法界寺

餓鬼も喰へ開の夜中の鱸汁

同

攝待

攝待や菩提樹蔭の片庇

蕪村



攝待にさせる忘れて西へ行  
 攝待へよらで過行く狂女かな  
 攝待の施主や佛屋善右衛門  
 攝待の札所や札の打ち納  
 攝待や芝居のやうな子順禮  
 衝突入  
 つと入やしる人に逢ふ拍子拔  
 つと入や納戸の暖簾ゆかしさよ  
 二三軒つと入しゆく旅の人

踊

看病の耳に更行く踊かな  
 萍のさそひあはせて踊かな  
 明けかゝる踊も秋のあはれかな  
 ひたと犬の鳴く町越えて踊かな  
 錦木の門をめぐりて踊かな  
 猫は應舉がたはむれなり杓  
 子は村が酔書なり  
 爺婆も猫も杓子も踊かな  
 英一蝶が書に讃望されて  
 四五人に月落ちかゝる踊かな  
 細腰の法師すゞろに踊りけり  
 雷のあとを淋しき踊かな  
 雨雲の月をかすめし踊哉  
 踊りけり腰にぶらつく奉賀帳

角 觥

腥き漁村の月のをどり哉  
 角髪や奥を出羽のすまひとり  
 むかしきけ秩父殿さへ角力取  
 許六が書に  
 勝すまふいづも上手に米の飯  
 故郷の座頭に逢ひぬ角力取  
 飛入の力者あやしき角力かな  
 よき角力出て來ぬ老の憾みかな  
 春夜に句をとはれて

日頃中よくて恥ある角力かな  
 夜角力の草にすだくや裸虫  
 夕露や伏見の角力ちりくゝに  
 あたまうつ家に歸るや角力取  
 訪よりし角力うれしき端居かな  
 負まじき角力を寝物語りかな  
 角力取黄楊の小櫛をかりの宿  
 二つ三つよき名望する角力取  
 ちかづきの角力に逢ひぬ繻師  
 阿波人は阿波の相撲を最負哉  
 四ツに組んで最負の多き相撲哉  
 幕の内になつて故郷に歸りけり  
 大關にならて老ぬる角力哉  
 幾秋をまけて老ぬる角力哉



大關と大關と組む角力かな  
 角力取に角力取の子もなかりけり  
 相撲取小さき妻をもちてけり  
 憎まれて見にくき顔や相撲取  
 番附に最負相撲を評しけり  
 角力取の猪首はつらし富士の山  
 角力取の見て居る辻の角紙哉  
 子供角紙  
 廻し付けて子供角力の並びけり  
 地 取  
 組合うて物打語る地どり哉  
 花 火  
 もの焚て花火に遠きかゝり舟  
 花火見えて涙かまじき家百戸  
 花火せよ淀の御茶屋の宵月夜  
 木の末に遠くの花火開きけり  
 川上は花火にうとき月夜哉  
 富士見えて物うき晝の花火哉  
 夕榮や晝の花火の打終り  
 警察の船もこぎ行く花火哉  
 兩國川開  
 夕飯や花火聞ゆる川開  
 兩國の花火聞ゆる月夜哉  
 後敷入

子規

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

子規

蕪村

藪入や皆見覺えの木樵垣  
 やぶ入もせぬまで老いぬ秋の風  
 秋彼岸會

子規

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

餅の名や秋の彼岸は萩にこそ  
 御萩配る彼岸の使行き逢ひぬ  
 梨子腹も牡丹餅腹も彼岸かな  
 山吹の歸り花見る彼岸哉  
 地藏會  
 地藏會やちか道をゆく祭り客  
 駒 迎  
 棧やまのふもひいつ駒迎  
 駒迎ことにゆしや額白  
 伊勢遷宮  
 尊さに皆おしあひぬ御遷宮  
 掛 市  
 住よしの市に立て  
 枳買うて分別かはる月見哉  
 城南寺祭  
 腹あしき僧も餅くへ城南寺祭  
 牛 祭  
 角文字のいさ月もよし牛祭  
 神田祭  
 捨團扇風と化しけり樽天王  
 秋 祭

蕪村

同

同

同

同

同



祭見に狐も尾花かざし来よ  
一日の秋にぎやかに祭かな  
牛蒡肥て鎮守の祭近きぬ  
同 同 子規

八 朔

八朔や天の橋立たばぬ鬘斗  
八朔やさて明日よりは二日月  
世 燕 村 燕

重 陽

盃の下行く菊や朽木盆  
世 燕

九月九日乙州か一樽を携へ

来りければ

草の戸や日暮てくれし菊の酒  
同

くらがり時にて

菊の香にくらがり上る節句哉  
同

新曆重陽

栗飯や丝瓜の花の黄なるあり  
子 規

落し水

俱利伽羅や三度越ても落し水  
世 燕

萍やしかも山田のおとし水  
同

雨乞の小町が果や落し水  
燕 村

落し水柳に遠くなりけり  
同

村々の寐心更けぬ落し水  
同

足あとのなき田わびしや落し水  
同

落し水田毎の關となりけり  
同

たな橋は歪みなりなり落し水  
同

起ても

曉哉

日燒田や二反はからき落し水  
子 規  
晚稻田も水を落して仕舞けり  
同 同  
千町田や夕静かにおとし水  
同

毛 見

毛見衆の舟さし下せ最上川  
燕 村

虫 送

虫送る松明森にかくれけり  
子 規

案山子

島主案山子に逢ふて戻りけり  
燕 村

木曾殿の田に依然たる案山子かな  
同

人に似よと老の作れる案山子かな  
同

武者繪賛

御所柿にたのまれ顔の案山子かな  
同

花鳥の彩色のこす案山子かな  
同

稻かれば化をあらはす案山子かな  
同

我足にかうべぬかる案山子かな  
同

姓名は何子か號は案山子哉  
同

打盡す秋にそむ案山子かな  
同

錦する秋の野末の案山子かな  
同

三輪の田に頭巾着て居る案山子哉  
同

水落て細腰高き案山子かな  
同

笠とれて面目もなき案山子かな  
同

雲裡房つくしへ旅立ちて我

に同行をすしめけるにまゆ

と野にこくとく



かざりければ

秋風のうごかして行く案山子哉 燕村  
其中に最も愚なる案山子哉 子規  
乞食の夢に案山子となりけり 同

自慙

十年の狂態今に案山子哉 同  
兼平の塚を案山子の矢尻哉 同  
大水を踏こたへたる案山子哉 同  
どう見ても案山子に耳はなかり鳥 同  
人立て鳥追舟の案山子哉 同  
麓田の夕日に多き案山子哉 同

鳴子

家ありや煙の傳ふ鳴子繩 燕村  
知己の鳴子ならして通りけり 同  
秋されや我身ひとつの鳴子引 同  
思ひ出ししく引く鳴子哉 子規  
旅人を追かけて引く鳴子哉 同  
鳴子なりて鳥飛びぬ敵隠れたり 同  
何氣なく引けど鳴子の妻まじさ 同  
あれよ／＼鳴子に鳥の飛ぶことよ 同  
淋しさにうつむいて引く鳴子哉 同  
獨りゆれ獨りをどろく鳴子哉 同  
曳けば曳くものと書から鳴子曳 同  
曳いてから耳立て／＼聞く鳴子哉 同

引板

稻妻に一ゆりゆれる鳴子哉 同  
鳴子曳書から秋をなぶりけり 同  
あなくるし水盡んとす引板の音 燕村  
山蔭や誰呼子鳥引板の音 同

扇置

丸岡の天龍寺を出る時金澤 九岡の北枝と別れにのぞみて  
物書て扇ひきささく別哉 芭蕉  
狩衣の袖より捨る扇かな 燕村  
發心の歌書き捨る扇かな 子規  
捨團扇 同

白頭の吟を書きけり捨うちは 同  
美人の團扇持ちたる圖 同

秋の蠅

秋の蚊帳主ばかりになりけり 燕村  
病人の息たえ／＼に秋の蠅 子規  
裏店の貧乏見ゆる秋の蚊帳 同  
日三竿主か寐たる秋の蚊帳 同  
筆も墨も沙瓶も内に秋の蠅 同  
蠅の別 同

二つ三つ蚊の来る蚊帳の別れ哉 同  
寝所を替たる蚊屋のわかれ哉 同



病中

蚊屋の別れ 汝瓶に遠き心かな 子規

鉞立や肩に槌うつからころも 芭蕉

近江路を通り侍る頃日野の

邊にて胡麻といふ者に上の

衣とられて

剝れぬる身にそきぬたの響き哉 同

よし野にて

砧打て我に聞せよや坊か妻 同

聲澄て北斗にひびくきぬた哉 同

猿曳は猿の小袖をきぬた哉 同

貴人の岡に立聞く砧かな 蕪村

迷ひ子を呼べば打やむ砧哉 同

霧ふかき廣野に千々の砧かな 同

枕にと砧よせたるたはれ哉 同

比叡に通ふ麓の家の砧かな 同

旅人に我家知らるゝ砧かな 同

農夫の衣搦つらん小家から 同

我則主して會催しけるに

小路行は近く聞ゆる砧かな 同

聲深き庄司がもとの砧かな 同

なつかしき忍の里の砧かな 同

この二日砧聞えぬ隣かな 同

うき我に砧うて今は又止みぬ 同

石をうつ狐守る夜の砧かな 同

うき人に手をうたれたる砧かな 同

遠近をちこちとうつ砧かな 同

秋惜む戸におとつるゝ砧かな 同

説教に行かて嬌の砧うつ 子規

早ちるや多摩の里人砧うつ 同

小博奕にまけて戻れば砧かな 同

玉川や夜毎の月に砧打つ 同

人遅し砧うたうよ更かさうよ 同

里の月砧打つべく夜はなりぬ 同

手拭に紅葉打ち出す砧哉 同

嫁入りて餘所の砧を打にくき 同

打ちやみつ打ちつ砧に恨あり 同

遠方の子を思ひく砧うつ 同

薬掘

醫師何かしの像

村雨を脊中に負うて柴胡掘 芭蕉

徳本の門も過たり薬掘 蕪村

薬掘けふは蛇骨を得たりけり 同

崩れ築

しかくくと主來訪す下り築 蕪村

新酒 堀の月に啼音や崩れ築 同



山紫と千種の濱に遊びて

鬼貫や新酒の中の貧に處す 燕 村  
 新酒賣る亭主の髯や水滸傳 子 規  
 悪僧の評議をこらす新酒哉 同  
 駕泉の空腹にのむ新酒哉 同  
 馬叱る新酒の酔や頬冠り 同  
 我病んで新酒の債をはたらるゝ 同  
 酒の新ならんよりは蕎麥の新なれ 同  
 狐ないて新酒の酔のさめにけり 同  
 君今來ん新酒の烟のわき上る 同  
 居酒屋に新酒の友を得たりけり 同

中山の蕎麥屋にて

新酒くひは中山寺の僧共か 同  
 柚味噌 同

なめる

我ねふり彼ねふる柚味噌一つ哉 同  
 俳諧の奈良茶茶の湯の柚味噌哉 同  
 老僧や手底に柚味噌の味噌を點す 同  
 小僧既に柚味噌の底を叩きけり 同  
 柚子の玉味噌の火焰を吐かんとす 同  
 禁酒して茶の道に入る柚味噌哉 同  
 木守の終に柚味噌とならん哉 同  
 六句目にさし合のある柚味噌哉 同  
 柚味噌焼く雨の夕や菊百句 同  
 我庵や柚味噌賣る家遠からず 同

草庵や

釜焦ける柚の上味噌冷たかり 同  
 膳もなき壘の上の柚味噌哉 同  
 柚味噌買て吉田の里に歸りけり 同  
 赤菊を添て柚味噌の贈り物 同  
 柚の木元として京極に柚味噌出づ 同  
 尻魚けし柚味噌の釜や古壘 同

鯉 漬

善き酒を呑む主や鯉漬 同

今年米

熊野路や三日の糧の今年米 燕 村  
 大高に君しろしめせ今年米 同  
 神を祝ふ小豆の飯や今年米 子 規

新 米

新米もまだ草の實の匂ひ哉 燕 村  
 新米の坂田は早し最上川 同  
 新米に假居の君のもとり哉 同  
 新米の二十駄ばかり城下口 子 規  
 新米や目利かしこき掌 同  
 新米を賣に出でたり小百姓 同  
 新米を河の東に運びけり 同

糶

糶干すや雞遊ぶ門の内 同



生類

鹿

牡鹿山

牡鹿山

武藏野や一寸ほとな鹿の聲  
ひれふりて牝鹿もよるや牡鹿鳥

芭蕉

奈良にて

ひいと啼尻聲悲し夜の鹿  
女夫鹿や毛に毛か揃て毛六かし  
窓の灯を山へな見せそ鹿の聲

同

蕪村

洛東金福寺寫經會題鹿

三度鳴て聞えずなりぬ鹿の聲  
鹿鳴てはしその木末あれにけり  
菜畑の霜夜は早し鹿の聲  
戀わたる鹿や臥猪の枕元

同

同

秋の佛といふ題にて

鹿の聲下駄のあまりの佛かな  
雨中の鹿といふ題を得て

同

雨の鹿戀に朽ちぬは角ばかり

同

鹿啼や宵の雨曉の月  
立聞の心地こそすれ鹿の聲

同

なりけり

卯の花のゆふべにも似よ鹿の聲

同

けものを三つ集めて發句せ

よといへるに

猪の狸寐入や鹿の聲

同

ある山寺へ鹿聞にまかりけ  
るに茶を汲沙彌の夜すがら  
ねぶらてありければ晋子が

狂句を思ひ出て

鹿の聲小坊主に角なかりけり

同

殘照亭晚望

鹿ながら山影門に入る日かな  
山守の月夜野守の霜夜鹿の聲  
戀風はどこを吹たそ鹿の聲  
櫻さへ紅葉しにけり鹿の聲  
折あしく門こそ叩け鹿の聲  
小男鹿や僧都か軒も細柱  
鹿寒く角も身にそふ枯木かな  
萩に寐て月見上げたる小鹿哉  
鹿の首ねちれて細き月夜哉  
二三匹鹿の立ちたる刈田哉  
旅人や鹿逐ひありく春日山  
月代や鹿の伏しどは松のかけ  
鹿なくや尾上にかゝる天の川  
旅籠屋の厠に鹿を聞く夜哉

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

子規



宮鳥の神殿はしる男鹿哉 子規  
 爐にくべて紅葉を焚けは鹿の聲 同  
 神に灯をあけて戻れば鹿の聲 同  
 鹿の聲鹿や見ゆると戸を明る 同  
 神さびて鹿なく奈良の都哉 同  
 二三四鹿なく月の木の間哉 同  
 鹿の尾のうしろを見れば闇夜哉 同  
 幸掘らんと行けば男鹿に出逢けり 同  
 鹿なくや杉の梢の二十日月 同  
 鹿老いて猿の聲にも似たる哉 同  
 月に伏しつ仰きつ鹿の姿かな 同  
 鹿二つ吊して獵師夜食す 同

鹿 笛

鹿笛を偽りならず山屋敷 兼村  
 鹿聞きに来て鹿笛を聞夜哉 子規  
 鹿笛のふき止んで人現はるし 同  
 鹿笛や鹿走り行く葛の風 同  
 鹿笛のやみけりやがて銃の音 同  
 鹿笛にこたへて鹿の遠音哉 同  
 鹿ないて又鹿笛を吹き出しぬ 同

雁

堅田にて

●病雁の夜寒に落て旅寐哉 芭蕉

堅田落雁

鳥の文かたじの雁よ片便宜 同  
 夜着に寐て雁か音寒し旅の宿 同  
 朝風や只白雲に雁ひとつ 同  
 はつかりに羽織の紐を忘れたり 燕村  
 雁啼や舟に魚焼く琵琶湖上 同

探題雁字

一行の雁や端山に月を印す 同  
 雁の聲遠悉く破れたり 子規  
 雁低く芒の上をわたりけり 同  
 聞きやるや闇に押し行く雁の聲 同  
 雨となりぬ雁聲昨夜低かりし 同  
 縫物や灯をかきたつる雁の聲 同  
 人を送りて歸るはしげや雁の聲 同  
 雨の雁ひとり屏風の月を見る 同  
 雁なくや巖にしろき夜の浪 同  
 汽車道に低く雁とぶ月夜哉 同  
 ひらくと雁かねたまる小池哉 同  
 月の出や背背たてゝ小田の雁 同  
 初 鴨  
 つくくと聞は初鴨鳴て居る 同  
 鴨なくや一番高い木の先に 同  
 鴨なくや雑木の中の古社 同  
 鴨なくや十日の雨の晴際を 同



鴟鳴や菽のうしろの蕎麥島 子規  
 鴟鳴や晩稻かけたる大師道 同  
 鴟鳴て妙義赤城の日和哉 同  
 演習の野中の杉や百舌鳥の聲 同  
 馬士去りて鴟鳴て土堤の淋しさよ 同  
 鳴なくや朝顔赤き花の一つ 同

秋分の日初て鴟の聲を聞いて

鴟の晝蟬の夜と分れけり 同  
 鴟ないて北海の林檎到來す 同  
 稻かけし榛の梢や鴟の聲 同  
 鴟ないて秋の日和を定めけり 同

鴟落

此森もとかく過ぎけり鴟落 燕村  
 野に近き根岸の里や鴟落 子規  
 罍を出て餌につく鴟の囀哉 同

鴟の草莖

草莖を失ふ百舌鳥の高音哉 燕村  
 沓の代はたられて鴟の聲悲し 子規

鴟

鴟のこぼし去ぬる實の赤さ 燕村  
 鴟や晝の朝顔花細し 子規

三島神社

額けは鴟なくやどこてやら 同

箱根山

我形を見かけて鴟の鳴らしさ 同  
 目白 同

南天の實をこぼしたる目白哉 同  
 誰やらが口真似すれば目白啼 同

鴟

田中の法藏寺に遊て

刈あとや早稻かたくの鴟の聲 芭蕉  
 鴟立つて秋天ひくき眺めかな 燕村  
 鴟遠く歛すくぐ水のうねりかな 同

竹溪法師丹後へ下るに

たつ鴟と眠る鴟ありふた法師 同  
 立ては淋し立たねは淋し鴟一つ 子規  
 鴟立てあとに物なき入日哉 同  
 鴟黒く冥土紫の夕かな 同

鴟の小包到着三羽ひとくくりにしてあり

淋しさの三羽減りけり鴟の秋 同  
 勅選にもれてや鴟の猶さびし 同

鴟

範頼の墓に笠をさしけて

鴟鶴よ此笠たしく事なかれ 同  
 鴟鶴や浪うちかけし岩の上 同  
 最上川 同

鴟鶴の見えそめてより山けはし

同



淵靜かに鶴鶴の尾の動きけり 子規

鶉

田莊酒家

なり

桐の木に鶉なくなる。堀の内  
鶉の目も今やくれぬと鳴く鶉  
小百姓鶉取る老となりけり  
粟の穂に鶉かくれて見えずなりぬ  
粟の穂に富士はかくれて鶉啼く

渡 鳥

目にかゝる雲やしはしの渡鳥  
世渡りや渡りくらべて渡り鳥  
渡り鳥こゝを瀬にせん寺林  
渡り鳥雲の機手のにしきかな

色 鳥

色鳥の聲を揃へてわたるげな 子規  
小鳥来る 音うれしきよ板庇 燕村

朝鳥の来れば嬉しき日和哉 子規  
歸 燕 行く燕また来る芽張り柳迄 芭蕉

花に来て花野に歸る乙鳥哉 同  
四十雀 老の名のありとも知らて四十雀 同

山 雀 かつ散らす庭の紅葉や四十雀 子規

山雀や樵の老木に寐に戻る 燕村  
稻 雀 稻雀茶の木はたけや逃ところ 芭蕉

稻雀稻を逐はれて唐櫃へ 子規  
一反は刈残す田の雀かな 同  
雀成蛤 期甜めて蛤になる雀かな 同

鳥さしの蛤賣になりもせて 同  
雀蛤になり藤太龍宮より歸る 同  
舌切られて雀蛤とならん思ひ 同  
成佛の蛤となる雀かな 同  
稻雀案山子に射られ海に入る 同

啄木鳥 啄木鳥の柱をたたく住居哉 芭蕉  
手斧うつ音も木深し啄木鳥 燕村  
木のうろに隠れ失せけり啄木鳥 子規

鳩 吹 鳩吹や寺領の畑の柿林 同  
鳩のとぶ方に鳩吹く聲遠し 同  
鳩吹の貧しき里を通りけり 同  
蟲 夜竊に虫は月下の粟を穿つ 芭蕉



益過きて宵開くらし虫の聲  
 よるへをいつ一葉に虫の旅寐して  
 虫啼や河内通ひの小提灯  
 暗かりの渺茫として虫の聲  
 竹垣の外は上野や虫の聲  
 富める人の虫買て放つ植木鉢  
 窓の灯の草にうつりて虫の聲  
 夜涼如水書燈に迫る虫の聲  
 様々の虫なく夜となりけり

細廬の影襖にあり

つくくと我影見るや虫の聲  
 笠塚や晝の虫なく石の下  
 虫の聲溢し歌よみならば歌よまん

隣家に入石教會といふあり

八石の拍子木なるや虫の聲

元光院

虫なくや日出て、猶暗き庭

虫 聞

虫さくべく茲に亭あり岡の上

虫 賣

虫賣のかことがまじき朝寐哉

虫賣や聲かしましき市の月

虫 籠

虫籠やこちらで鳴けばあちらでも

芭 蕉

子 規

同

同

同

同

同

同

同

蟬

蟬や相如が弦の切る、時 蕉 村

蟬や物音絶えし臺所 子 規

蚯蚓鳴

蚯蚓なくや土の達磨は元の土 同

童子呼べば答なし只蚯蚓なく 同

蛙鳴蟬噪も一時と蚯蚓なく 同

松 虫

松虫や露にぬれたる絹團扇 同

人は寐て籠の松虫啼出てぬ 同

菴

静かさや繪かゝる壁のさりくす 芭 蕉

床へ

床に来て軒に入やさりくす 同

朝なく手習すいむさりくす 同

白髪ぬく枕の下やさりくす 同

さひしさを釘にかけたる菴 同

加賀の小松といふ所太田の

神社の寶物として寶盛か菊

から草の甲同く錦のされあ

り遠き事なからまのあたり

あはれにおほえて

無さんや甲の下のさりくす 同

猪の床にも入るやさりくす 同

電の壁にしむ夜やさりくす 同

あなむさんや







蓼虫の鳴くや芭蕉の塚の木に 子規

秋の蚊 蓼虫の鳴く時唐辛子赤し 同

秋の蚊の人を尋ねる心かな 子規

一夜二夜秋の蚊居らずなりにけり 同

秋の蚊や燈火くらき棺の前 同

秋の蚊の鳴聲細し古卒塔婆 同

秋の蚊や秋海棠を鳴て出る 同

瘦牖に秋の蚊とまる惜さ哉 同

秋の蚊のよろくと来て人を刺す 同

残る蚊や飄々として飛んで来る 同

病室に蚊屋の寒さや蚊の名残 同

秋の蚊の人見て出るよ亂塔場 同

秋の蟬 一日く思ひ追るか秋の蟬 子規

病牀のうめきに和して秋の蟬 同

秋の蟬推伐らばやと思ふ哉 同

死かけて猶やかましき秋の蟬 同

あながまな死損ひの秋の蟬 同

秋の蠅 秋の蠅追へば又来る叩けば死ぬ 同

黒澤尻にて 同

秋の蠅二尺のうちを立去らず 同

病室や窓あたゝかに秋の蠅 同

九月蟬

秋の蠅叩き殺せと命じけり 同

秋の蠅殺せども猶盡さぬ哉 同

濕氣多く汗はむ日なり秋の蠅 同

秋の蝶 馬糞に息つく秋の胡蝶哉 同

秋の蝶の長柄の傘にとまりけり 同

身の果を蟻の餌食と秋の蝶 同

秋の螢 枯柴にくひ入る秋の螢哉 同

消もせて悲しき秋の螢哉 同

蝸 蝸や夕日の窓に橙の影 同

蝸や旅籠もすなる一軒家 同

蝸や机を壓す椎の影 同

蝸や上野の茶店灯のともる 同

書に倦むや蝸ないて飯をそし 同

蝸はなけど髯の親爺哉 同

清川 蝸の二十五年もむかし哉 同

蝸や夕日の里は見えなから 同

蝸の茶屋静かなる木の間哉 同

蝸や神鳴はれて又夕日 同



初て蝸を聞く

雨晴て蝸鳴くと書く日記 子規

蝨

蝨とる人にとびつく蝨かな  
 餘所の田へ稻子の移る日和哉  
 刈株に蝨老い行く日數かな  
 菅笠に蝨分け行く野路かな  
 稻刈りてにぶくなりたる蝨哉  
 稻刈りて水に飛び込む稻子哉  
 我袖に來てはね返るいなご哉  
 ばらくと汽車に驚く蝨哉  
 飛び付ていなごを落す蛙哉  
 低くとぶ畔の蝨や日の弱り

河鹿

河鹿鳴く袖なつかしき火打石  
 加茂川の河鹿は知らず都人  
 獺にふみつけられて河鹿鳴く  
 笠を手に急ぐ夕や河鹿なく  
 蛇入穴 同 子規

蛇穴に入るや彼岸の鐘がなる  
 蛇穴に入る時曼珠沙華赤し  
 洪水の來らんとして蛇穴に入る  
 蛇の入りし櫃の穴を塞きけり  
 五蛇穴に一蛇泣く夜の風悲し

同 同 同 同 同

江 鮭

江鮭ありやもすらん富士の湖  
 瀬田降て志賀の夕日や江鮭

鮭

鮭馬のかげ見ん關の渡し舟  
 紅葉鮭 芭蕉

紅葉鮭

是もまた水生木やもみち鮭  
 同

秋の魚

湖の秋の小魚を奉る 子規

鱧

鱧得てうしろめたさよ浪の月  
 釣上げし鱧の巨口玉や吐

百日の鯉切盡て鱧かな 同 村

貧厨の光を生す鱧かな 子規

沙魚

沙魚釣の小舟漕ぐなる窓の前 蕉村

鮒

山中十景題高瀬漁火  
 篝火に鮒や浪の下ひせび 芭蕉

落鮎

宇治行  
 鮎落ちていよく高き尾上かな 蕉村

鮎

落鮎の三の瀬あたり人網す 子規

鮎

鮎落ちていよく高き尾上かな 蕉村  
 落鮎の三の瀬あたり人網す 子規



夕焼や鯛の網に人だかり  
 覗き行く夕餉の家や鯛賣  
 轉地する安房の濱地や鯛引  
 大漁や鯛をぼるゝ濱の道  
 鯛網鯛の中の小鯛かな  
 同 同 同 同 同 子規

大漁

十ヶ村鯛喰はぬは寺ばかり  
 七浦の夕雲あかし鯛ひき  
 鯛焼く隣同士や木槿垣  
 鯛干す磯静かなり遠鷗  
 夕餉すみて濱の散歩や鯛網  
 網あげて鯛ちらばる濱地哉  
 目を盗み小鯛拾ふ貧女哉  
 一家内擧つて出たり鯛網  
 今とりし鯛をわけてもらひけり  
 安房へ来て鯛を喰はぬ脚氣哉  
 同 同 同 同 同 同

植類

黄葉

黄にそみし梢を山のたしずまひ  
 同 燕・村

初紅葉

或女の應舉に猿の書をかし  
 せて讚望みけるに立圃の口  
 質にに倣うて

初紅葉を染とらは、龍田山  
 霜根路は一日早し初紅葉  
 同 子規

紅葉

色づくや豆腐に落て薄紅葉  
 小原女の足の早さよ夕紅葉  
 このもよりかのも色よき紅葉かな  
 山くれて紅葉の朱をうはひけり  
 折得たる紅葉さてしも横ひらた  
 同 同 同 同 同

高雄

西行の夜具も出である紅葉かな  
 花紅葉終にしほ木の夕煙  
 谷水のつきてこがるし紅葉かな  
 ひら紅葉會津商人なつかしき  
 同 同 同 同



赤葉かな

よらて過る藤澤寺の紅葉かな 蕪村  
 紅葉して寺あるさまの梢かな 同  
 出家して親王いませ里の紅葉かな 同  
 家やいつこ夕山紅葉人歸る 子規  
 白瀧の二筋かゝる紅葉かな 同  
 紅葉折て夕日寒かる女かな 同  
 紅葉焼く法師は知らず酒の壺 同

嵐山

松の木はあらはれにけり村紅葉 同  
 牛の子を追ひく還入る紅葉哉 同  
 一つかみつつ爐にくべる紅葉哉 同  
 笹原に笹のたけなる紅葉哉 同

元光院觀月會

紅葉山の文庫保ちし人は誰 同  
 ほととぎすに題す

文と詩と松と紅葉とまじりけり 同  
 灯ともしの顔に灯うつる紅葉哉 同  
 南岸の茶屋北岸の寺や村紅葉 同  
 杉木立中に紅葉の家居あり 同  
 山に倚て家まばらなり村紅葉 同  
 紅葉する木立もなしに山深し 同

愚庵十二勝の内 錦楓屋

紅葉散りて夕日少なし苔の道 同  
 紅葉見え瀧見え茶屋の床几哉 同

時雨さし

紅葉見

神殿の御格子あろす紅葉哉 同  
 唐かねの鎌ぬきの門や薄紅葉 同  
 人呼ぶや紅葉の宿のきぬかつき 同

紅葉見

紅葉見や用意かしこき傘二本 蕪村  
 紅葉見の岩に水取肌かな 同  
 紅葉見や女のせたる駕の雨 子規  
 紅葉見の船つけて居る三軒家 同  
 暮吹いて伶人見ゆる紅葉哉 同  
 騎馬一人従者五六人紅葉狩 同

柿紅葉

茂山やさては家あり柿紅葉 蕪村  
 蕎麥白く柿の紅葉に夕榮す 子規

櫨紅葉

面白や一尺の木も櫨紅葉 同

櫻紅葉

紅葉してそれも散り行く櫻哉 蕪村  
 桐一葉

嵐雪におくる

さひしさを問ふて呉れぬか桐一葉 芭蕉  
 石上に夢をたたくや桐一葉 子規  
 つくねんとして居れば桐の一葉落 同  
 不變色松

秋の日の色こそかへぬ松の聲 芭蕉



再遊松林館

色かへぬ松や主は知らぬ人 子規

竹の春 おのが葉に月朧なり竹の春 蕪村

散 柳 柳陰軒にて 芭蕉

散る柳あるしも我も鐘を聞く

金昌寺にて

庭掃て出るや寺にちる柳 同

水清くなりて柳のちる日哉 同

遊行柳のもとにて

柳 散 清 水 涵 石 處 々 蕪村

大柳散り盡すとも見えざりき 子規

今も猶柳ちるなり山谷堀 同

根岸音無川

柳ちり菜屑流るゝ小川哉 同

柳散る秦淮と詩に作りけり 同

木 扉 木扉や母か教ふる二弦琴 同

木 扉 や人は寝たる庭の月 同

木 権 花木権はたか童のかさし哉 芭蕉

道への 道はたの木権は馬に喰はれぬ 同

馬上吟

藪にうすきゆかりの木権かな 蕪村

修理寮の雨に葦行く木権かな 同

かけ落の夫婦来て住む木権垣 子規

十軒の長屋とりまく木権哉 同

道ばたの木権にたまる埃哉 同

道端に蔓草まとふ木権哉 同

花木権家ある限り機の音 同

汐風や瘦せて花なき木権垣 同

繪屏風に木権をもるゝ夕日哉 同

木権垣本所區を野に出る所 同

木権垣出水の跡を殘しけり 同

木権垣人も通らぬ小道かな 同

木権咲て里の社の普請かな 同

木権咲く土手の人馬や酒田道 同

芙蓉

遊女の書讀

枝ふりの日にくかはる芙蓉哉 芭蕉

霧雨の空を芙蓉の天氣哉 同

日のあとの夕顔黒し紅芙蓉 同

桐の葉は落盡すなるを木芙蓉 蕪村

日を帯びて芙蓉傾く憾みかな 同

八つ時の太鼓打出す芙蓉哉 子規

廢苑や芙蓉を覆ふ蘆の風 同

明家の草の中より芙蓉哉 同

霞の風







柿喰ふや道灌山の婆々が茶屋

子規

つりがねの帯の所が澁かりき

同

千柿や湯殿のうしろ納屋の前

同

山本にかたよる柿の小村哉

同

愚庵より柿をおくられて

同

御佛に供へあまりの柿十五

同

或日夜にかけて俳句函の底

同

を叩きて

同

三千の俳句を閲し柿二つ

同

淋しげに柿くふは基を知らざらん

同

胃痛

同

柿もくはて随問随答を草しける

同

澁柿

同

澁柿や一口は食ふ猿の面

同

澁柿ややがて紙子のかへり花

同

澁柿の木蔭に遊ぶ童かな

同

露月國手を詠る

同

澁柿は馬鹿の薬になるまいか

同

澁柿や落てふまるし石の上

同

栗

同

栗備ふ恵心が作の阿彌陀佛

同

焼栗のはねて驚く一人かな

同

栗飯

同

栗飯や病人ながら大喰ひ

同

新曆重陽

同

栗飯の四椀とかきし日記哉

同

主病む丝瓜の宿や栗の飯

同

栗飯や目黒の茶屋の發句會

同

栗飯や不動參の大工連

同

栗の實

同

道ばたの桃の木に實はなかりけり

同

桃の實を論語よむ子に分ちけり

同

桃の實の桃源を出て流れけり

同

我腹にすこやかなる男の子

同

一人ぼしやと申されければ

同

桃太郎に桃金太郎に何やろ

同

盡ばみて桃紅ゐの腐りかな

同

桃盗む子を叱りけり垣の内

同

梨の實

同

瀾水より

同

ザボンより大きき梨をもらひけり

同

長十郎といふ梨を贈り越し

同



たる野老氏に酬ゆ

石の卷の長十郎が見舞かな 子規  
 佛へと梨子十ばかり貰ひけり 同  
 鈴生りの小梨に村の曇かな 同  
 行秋の梨子並べたる在所哉 同  
 日毎く十顆の梨子を喰ひけり 同  
 大なる梨子を包みし袱紗哉 同  
 小刀や鉛筆を削り梨子を刻く 同

柘榴

盆栽の柘榴實垂れて落ちんとす 同  
 はちわれて實もこぼさるゝ柘榴哉 同

蜜柑

皮剥けば青烟たつみかん哉 同  
 路南紀伊國に入蜜柑畑 同  
 珍らしき蜜柑や人に参らする 同  
 佛壇の柑子を落す鼠かな 同

柚子

古家や累々として柚子黄なり 同  
 荒壁や柚子に梯子す武家屋敷 同

無花果

無花果の落ちても呉れぬ家主哉 同

棗

棗多き古家買うて移りけり 同  
 祇園の鴉愚庵の聚喰ひに来る 同

銀杏

行脚より歸れば棗熟しけり 同  
 稚子の寺なつかしむ銀杏哉 蕪村  
 銀杏ふんて静かに稚兒の下山哉 同  
 銀杏黄む 同

銀杏落葉

田圃から見ゆる谷中の銀杏哉 子規  
 落葉して塔より低き銀杏哉 同  
 雞遊ぶ銀杏の下の落葉哉 同  
 枯葉朽葉中に銀杏の落葉哉 同

藤の實

藤の實は俳諧にせん花の後 芭蕉

椎の實

椎の實に雀鴉を嚇すかな 子規

團栗

どん栗の廣葉貫く音すなり 同  
 猿聞く夜團栗落る頻りなり 同  
 椎拾ふあとに團栗哀れなり 同  
 團栗もかさよせらるゝ落葉哉 同  
 團栗の落ちずなりたる嵐かな 同

榎の實

榎の實ちる椋鳥の羽音や朝嵐 芭蕉  
 榎の實散る此頃うとし隣の子 子規

椋の實



木曾の椽浮世の人の土産哉

世 蕉

椽の木や

椽の實

椽の實や、囀かけたる家の北

子 規

通 草

元光院觀月會

老僧に通草をもらふ暇乞

同

梅 嫌

梅嫌鳥のさせじと端居かな

蕪 村

柿崎の小寺尊し梅嫌

同

鶉のうたゝ來鳴くや梅嫌

同

折呉るゝ心こぼさじ梅嫌

同

梅嫌折るや念珠をかけながら

同

貧しさに菊枯れし瓶の梅嫌

子 規

朝 顔

常麻寺にて

僧あさかほいく死かへる法の垣

芭 蕉

朝顔の花に啼行く蚊のよわり

同

和其角蓼莪句

朝顔に我は飯くふ男哉

同

嵐雪か書に讀のそみければ

朝顔は下手の書くさへ哀れなり

同

朝顔やこれも又我友ならず

同

朝顔の短夜眠る晝間かな

同

人々郊外に送出て三盃を傾

晝顔の

け侍るに

朝顔は酒もりしらぬさかり哉

同

閉 關

朝顔やひるは鎖あらず門の垣

同

朝顔や水ある方に人の立つ

同

洲水満如監

朝顔や一輪ふかし淵の色

蕪 村

朝顔や手拭のはしの藍をかこつ

同

朝顔の引捨てられし書かな

子 規

朝顔の鉢に分限を見する哉

同

叩けども朝顔さいて空家なり

同

朝顔の白きは繪にも書かぬなり

同

小傾城朝顔の君と申しけり

同

歸るか朝顔さくや留守の門

同

朝顔やとても短き浮世なら

同

逆上の人朝顔に遊ぶべし

同

行脚より歸りて

朝顔に今朝は朝寐の亭主あり

同

朝顔や九月の花に恥多き

同

葦や繪の具にじんて繪をなさず

同

朝顔や十日辰らぬ小商人

同

朝顔やあてありさうに伸ひる蔓

同

朝顔に吉原の夢はさめにけり

同

葦やいろくに咲いて皆萎む

同



朝顔や斜に咲きし蔓一つ 子規  
 朝顔のしぼまぬ秋となりけり 同  
 朝顔の一輪さしに萎みけり 同  
 葬や我に寫生の心あり 同  
 朝顔や團十郎の名を憎む 同  
 葬の淺黄は薄き夜明哉 同  
 葬や繪にかく内に萎れけり 同  
 葬の地を遺ひわたる明家哉 同  
 山里の朝顔藍も紺もなし 同  
 朝顔や紫しぼる朝の雨 同  
 朝顔や松の梢の花一つ 同

桔梗

桔梗も見ゆる花屋が持佛堂 燕村  
 修行者の徑にめつる桔梗かな 同  
 紫のふつとふくらむ桔梗哉 子規  
 桔梗刈りて菊の下葉の枯れし見ゆ 同  
 雨晴れて荒野の桔梗夕日照る 同  
 種に刈る桔梗長く花ひとつ 同  
 一籠の濃き紫や桔梗賣 同  
 桔梗折れは撫子恨む女心 同  
 銅瓶に白き桔梗をさしれたり 同

漱石寓居の一間を借りて

桔梗活けてしばらく假の書齋哉 同

女郎花

玉川の水におぼれそ女郎花 芭蕉  
 ひよろくと猶露けしや女郎花 同

瓢の銘

米のなき時は瓢に女郎花 同  
 女郎花をも葦ながら花ながら 蕪村  
 里人はさともおもはし女郎花 同  
 猪の露折かけて女郎花 同  
 とかくして一杷になりぬ女郎花 同  
 舟曳の脊丈低し女郎花 子規  
 女郎花宮守ならば物語れ 同  
 女郎花乞食の中の女かな 同

初戀

女郎花男郎花戀の初めなり 同  
 女郎花刀のこじりさはりけり 同  
 雨の日や皆倒れたる女郎花 同  
 關越て野道になりぬ女郎花 同  
 駕鼻は裸て寐たり女郎花 同

裁縫を修業する人に

女郎花女ながらも一人前 同  
 小法師に心ゆるすな女郎花 同

紫苑

床の間や紫苑を活けて弓靴 同

萱草

誰か塚を萱草咲ける自ら 同

折りぬ



萱草に雷遠き日かけかな 子規

秋海棠

秋海棠西瓜の色に咲にけり 世  
秋海棠に向ける病の寢床哉 子  
移し植し秋海棠や寐て見ゆる 規  
書き習ふ秋海棠の繪具かな 同  
秋海棠朝顔の花は飽き易き 同  
女媚びて秋海棠に何おもふ 同  
美女立てり秋海棠の如き哉 同  
毒蝶の秋海棠をおかすかな 同  
病牀に秋海棠を書きけり 同

祝結婚

君が植し秋海棠も甲斐ありき 同  
秋海棠に齒磨こぼす端居哉 同  
濡れて居る秋海棠や手水鉢 同  
化粧の間秋海棠の風さむし 同

病牀所見

伏して見る秋海棠の梢かな 同  
秋海棠妹が好みの小庭かな 同

家人の秋海棠を剪らんとい

ふを制して

秋海棠に鉄をあてる事勿れ 同

鶏頭花

鶏頭の根にむつまじき帯かな 蘇村

錦木は吹たほされて鶏頭花 同  
鶏頭や花のはちするいつまでも 同

鶏頭の十本ばかり百姓家 子規  
鶏頭を伐り倒したる夕日哉 同

佛壇に鶏頭枯るゝ日數かな 同

鶏頭や馬士が煙管の雁首に 同

鶏頭活けて地蔵を洗ふ願哉 同

鶏頭や二度の野分に恙なし 同

村雨の過ぎて鶏頭の夕日哉 同

薬葺の法華の寺や鶏頭華 同

鶏頭に犬の子の寐る日向哉 同

鶏頭の花に涙をそゝぎけり 同

大木に並んで高し鶏頭花 同

鶏頭や遊行を拜む道の端 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同



鯨釣の日和になりぬ葉雞頭  
美しき色見えそめぬ葉雞頭  
葉雞頭の首を投げたる天氣哉

子規

蘭

敦賀再榮院

病に蘇鐵の

門に入れば蘇鐵に蘭の匂ひ哉

芭蕉

悦堂和尚の隱室に招れて

香を残す蘭帳菊のやどり哉

同

或る茶店にて

蘭の香や蝶の翅にたさきものす

同

夜の蘭香にかくれてや花白し

同

蘭夕狐のくれし奇精を炷ん

同

蘭の香や菊より暗きほとりより

同

この蘭や五助が庭に昨日まで

同

清貧の家に客あり蘭の花

子規

蘭の主花さく事を厭ひけり

同

蘭を書いて墨に墨のこぼれけり

同

自慙

蘭の花我に鄙吝の心あり

同

潮州の碑の石摺や蘭の花

同

人賤しく蘭の價を論じけり

同

雨しぶく書齋の縁や蘭の花

同

菊

秋を経て蝶もなめるや菊の露

芭蕉

菊の露

蓮池の主翁又菊を愛す昨日  
は龍山の宴を開きけふは其  
酒の來れるとすしめて狂吟  
戯れとなす猶思ふ明年誰か  
健かなるらん事を

うきよひのいづれか今朝に残る菊

同

左柳亭にて

早く咲け九日もちかし宿の菊

同

草庵の雨

起あがる菊ほのかなり水のあと

同

北海の磯つたひして加州山

中の涌湯に浴す里人の曰此

所は扶桑三名湯の其一なり

と真に浴る事しばしくなれ

ば皮肉うるほひ筋骨に通り

て心神ゆるく偏に顔色をと

どむる心地す彼の桃源も母

をうしなひ慈童の菊の枝折

もしらす

山中や菊は手折らし湯の匂ひ  
見ところのあれや野分の後の菊

同

木因亭

隱家や月と菊とに田三反

同

如行亭



瘦ながらわりなき菊の苔哉

世 蕉

田家にやとる

稻こきの姥もめてたし菊の花

同

借水亭にて

影待や菊の香のする豆腐串

同

堅田の何某木匠醫師の兄の

亭にまねかれしに自ら茶を

たて酒をもてなされける野

菜八珍の中に菊花の脍いと

芳しければ

蝶も来て酢をすふ菊の脍哉

同

八町堀にて

菊の花咲くや石屋の石の間

同

敦賀専榮院

門に入れば菊に蘇鐵の匂ひ哉

同

大門通を過るに

琴箱や古物店の香戸の菊

同

菊の香や奈良は幾代の男振

同

素堂菊園の遊

菊の香や庭にされたる履の底

同

堅田禪瑞寺

朝茶の匂借しつかなり菊の花

同

奈良にて

菊の香や奈良には古き佛達

同

菊の香は  
海月夜

生玉邊より日をくらして  
菊に出て奈良と浪花は宵月夜

同

菊花讚

折ふしは酢になる菊の香哉

同

山科の五荷三束や菊の花

同

咲きみたす山路の菊を燈籠哉

同

村百戸菊なき門も見えぬかな

同

あさましき桃の落葉よ菊鳥

同

菊作り汝は菊の奴かな

同

紙燭して色失へる黄菊哉

同

ほさくと二本手折黄菊かな

同

西の京に宿もとめけり菊の時

同

けふ匂ふ觀世の辻子や菊の花

同

長瓶にうつくたる菊の香かな

同

山家の菊見にまかりけるに

あるじの翁筆硯をとらて

ほ句求めければ

菊の露うけて硯のいのちかな

同

二本づゝ菊參らせん佛達

同

日てりと伏水の小菊もらひけり

同

いさしらは投壺まゐらせん菊の花

同

菊さくや大師の堂の普請小屋

同

かんでらや蕾少なき市の菊

同

木綿なからよき衣著たり菊の花

同

子規



縁口へ押し出す菊の車哉 子規  
 菊賣るや十二街頭の塵の中 同  
 旭に向くや大輪の菊露ながら 同  
 酒買うて酒屋の菊を貰ひけり 同  
 菊時は菊を賣るなり小百姓 同  
 浮世哉菊に晴着の黒小袖 同  
 菊の匂を残して去りぬ把栗居士 同  
 事もなげに菊咲かせたる小家哉 同  
 百兩の菊百兩の萬年青かな 同  
 菊の花天長節は過ぎにけり 同  
 竹立てし蠟燭さしぬ菊の中 同  
 菊畑南の山は上野なり 同  
 菊咲くや樓に上れば舟遠し 同  
 呉れと云へばしたしか呉れ小菊哉 同  
 人形を刻む小庭や菊の花 同  
 南山にもたれて咲くや菊の花 同  
 門口や稻干す側の菊の花 同  
 日の旗や淋しき村の菊の花 同  
 旗一本菊一鉢の小家かな 同  
 大菊や金持めかす家構 同  
 金持の隠居なりけり菊作り 同  
 採菊籬  
 靈山の麓に白し菊の花 同  
 酔さめて十日の菊に煙草のむ 同

升飲の酒の雫や菊の花 同  
 菊あれて雞ねらふ鼯かな 同  
 谷川にのぞんで菊の宿屋哉 同  
 松を伐りて嬉し小菊に旭のあたる 同  
 足なへの伯爵菊をつくりけり 同  
 白菊 同  
 園女亭にて  
 白菊の目に立てし見る塵もなし 芭蕉  
 白菊やかゝるめてたき色はなくて 蕉村  
 白菊や庭にあまりて島まで 同

菊に古笠を覆たる圖に  
 白菊や呉山の雪を笠の下 同  
 野菊 同  
 なつかしき紫苑が下の野菊かな 蕉村  
 小狐のかくれ顔なる野菊かな 同  
 瘦馬の老尼のせ行く野菊哉 子規  
 初旅をなくさめ顔の野菊哉 同  
 どつさりと山裾下す野菊哉 同  
 稻刈りて野菊おとろふ小道哉 同  
 石原に瘦せて倒るし野菊哉 同

猿も一夜は  
 どみ置の原  
 又猿も一夜は  
 宿を萩のもと

萩 同  
 寐たる萩や容顔無標花の顔 芭蕉  
 萩原や一夜はやどせ山の犬 同  
 一つ家に遊女も寐たり萩と月 同



観水亭雨中の會

ぬれて行く人もあかしや雨の萩

芭蕉

種ノ濱

浪の間や小貝にまじる萩の塵

同

萩の聲  
又萩の聲

いろの濱

小萩られますほの小貝小さかつき

同

書讀

白露もこぼさぬ萩のうねり哉

同

藤堂玄虎子か庭半は作りし

と見て

風色やしどろに植し庭の萩

同

案の

萩の露米つく宿のとなり哉

同

旅人の火をうちこぼす萩の露

蕪村

白萩を春わかちとるちさりかな

同

うさ旅や萩の枝末の雨をよむ

同

小狐の何にむせけん小萩原

同

黄昏や萩に幽の高臺寺

同

萩咲て

萩にくれて玉田横野へわかれ行

同

岡の家に書縫織るや萩の花

同

宮城野の萩更科の蕎麥にいづれ

同

風をいたみ萩の上枝の花もなし

子規

みちのくは馬の多さよ萩の花

同

切株に一枝咲きし小萩かな

同

萩の中に猶白萩のあはれなり

同

水の上萩堆くこぼれけり  
妻をよぶ籠の鶉や庭の萩

同

牛伴旅立と聞きければ

同

萩の書も月の句も一つ袋哉

同

訪道遙子

夕月夜萩ある門を敲きけり

同

萩ちるや菟の下の水溜り

同

病牀

七日月庇の下に萩の上

同

垣の外に萩咲かせけり百花園

同

花少し残れる萩を刈りにけり

同

明星や取亂したる萩の花

同

萩さいて俗に墮つ松の小庭哉

同

野萩折々狂女か簪是見よや

同

名所や小僧案内す萩の庭

同

萩ちるや女机の愚案抄

同

僧房を借りて人すむ萩の花

同

萩の題に歌作らしむ庭の萩

同

庭あれて萩の亂れを繕はず

同

萩の風書燈消えんとしてあかる

同

萩寺の屏風に萩の發句かな

同

古庭の萩に錢取る御寺哉

同

小庭

野分待つ萩のけしきや花遅き

同



俳諧の自然といふことを

合點ぢや萩のうねりの其事か 子規

清女が藤かへけたるそれは

雲の上の御事これは根岸の

隅のあばらやに親一人子二

人の佗住居

妹か日覆をまくる萩の月 同

萩 芒

小松といふ所にて

しほらしき名や小松吹く萩芒 芭蕉

萩芒風絶ゆることもなかりけり 子規

讀小説

其果が萩と芒の心中かな 同

萩は月に芒は風になる夕 同

萩芒小町が笠は破れたり 同

芒

毒海長老我草の戸にして身

まかり侍るを葬りて

何事もまねき果たる芒哉 芭蕉

風妖けて芒に夜の雨凄し 同

芒見つ萩やなからん此ほとら 蕪村

山は暮て野は黄昏の芒かな 同

地下りに暮れ行野邊の芒かな 同

太祇十三回忌

線香やますほの芒二三本 同

永西法師はさうなきすきも

のなりし世を去りて二とせ

になりければ

秋ふたつちきをますほの芒かな 同

道根潜る芒ひとまとますほかな 同

追風に芒かりとる翁かな 同

十丈の杉六尺のすしきかな 子規

三日月の重みをしなふ芒哉 同

くへり上て片職さする芒哉 同

芒刈る童子に逢ひぬ箱根山 同

山姥の書に

奥山や秋はと問へば芒かな 同

田を隔て、芒の圃を見得たり 同

よべこゝに花火あげたる芒哉 同

旅はものゝ那須の芒にだまされな 同

芒賣去年の笠をかぶりけり 同

馬の尾を束ねて括る芒かな 同

箱根路や芒に不二の六合目 同

猪の嵐に向ふすしきかな 同

犬に逢ふ芒の山や里近き 同

箱根山芒八里と申さばや 同

山姥の力餅賣るすしき哉 同

菅笠の揃ふて動く芒かな 同



草鞋の緒切れてより込む芒哉 子規  
一秋の思ひに瘦する芒かな 同  
獵人の鐵砲見ゆる芒かな 同  
實方の芒は刈らず村の者 同

目黒

芒わけて甘藷先生の墓を得たり 同

花芒

花芒刈残すことはあらなくに 燕村  
汕断して嵐にあふな花芒 同

辨慶讀

花芒一夜はなびけ武藏坊 同

箱根

鍵立て、通る人なし花すゝき 子規

穂芒や稗多き野邊送り 同

伊豆相摸境もわかず花芒 同

草刈の刈揃へけり花芒 同

芋の湯氣團子の露や花芒 同

駕二つ徒歩五六人花すゝき 同

武藏野や島の隅の花芒 同

尾花

海見えて尾花か末の白帆哉 同

我亦紅

何ともな芒かもとの我亦紅 同

葛

葛の葉のうらみ顔なる細雨かな 燕村  
天狗風のこらす葛のうら葉かな 同

葛の葉や何におどろく夕間暮 子規

角紙草

道細し角力取草の花の露 芭蕉

水引草

彼岸過水引草の花ささぬ 子規

曼珠沙華

曼珠沙華蘭にたくひて狐啼 燕村

其あたり似た草もなし曼珠沙華 子規

道端やさよろりとしたる曼珠沙華 同

慈苴仁の小道盡きたり曼珠沙華 同

穢多寺の佛うつくし曼珠沙華 同

爪紅

爪紅の末摘花のゆかり哉 芭蕉

白粉花

妹が庭や秋海棠と白粉と 子規

道端に白粉咲きぬ須磨の里 同

一嵐白粉の花倒れけり 同

檀特花

草むらく檀特の花僅に赤し 同

草花

高田醫師細川青庵にて 芭蕉  
薬園にいつれの花を草枕 芭蕉



草色々々のく花の手から哉 世 蕉  
 草花や小川に添て王子まで 子 規  
 只の紙に草花にじむ繪具哉 同 同  
 西洋の草花赤し明屋敷 同 同  
 草の花つれなきものに思ひけり 同 同  
 草の花水水車場へ分れ行く 同 同  
 草花の一筋道や湯元まで 同 同  
 山鴛や榛名上れば草の花 同 同  
 草花の鉢並べたる床屋哉 同 同  
 五文づゝに分けて淋しや草の花 同 同

古戰場

骨も見えずむくろも見えず草の花 同  
 ひとり生の草皆花となりけり 同  
 市に得し草花植る夜半哉 同

稻の花

稻の花道灌山の日和かな 同  
 うぶすなに幟たてたり稻の花 同  
 山城に殘る夕日や稻の花 同  
 稻の花東籬菊いまた苔なし 同  
 湯治二十日山を出づれば稻の花 同  
 大藩のもの静かなり稻の花 同  
 大寺の上棟式や稻の花 同  
 南無大師石手の寺よ稻の花 同  
 四國路の小さき馬や稻の花 同

稻

したゝかに稻擔ひ行く法師哉 蕉 村  
 稻の香の嵐になりし夕かな 子 規  
 稻の穂や南に凌雲閣低し 同 同  
 雨合ひ上野の森や稻日和 同 同  
 法隆寺 同 同

稻刈

稲の雨斑鳩寺にまうてけり 同  
 稻つけて馬が行くなり稻の中 同  
 霧はれて稻の押し合ふ旭かな 同  
 静かさや稻の葉末の本願寺 同  
 稻の穂に十里の雨の静かなり 同  
 婆々つれし佛参りや稻曇 同  
 稻の香や汽車から見ゆる法隆寺 同  
 稻積んで車押し行く親子哉 同  
 稻の香や小山に添て汽車走る 同  
 人に米をもらひて 同  
 世の中は稻刈る頃か草の庵 芭 蕉  
 稻刈て落付顔や小百姓 同  
 稻刈て小草に秋の日のあたる 蕉 村  
 刈稻の神に仕ふや土の恩 同  
 股引の女稻刈る田を深み 子 規  
 稻刈るや焼場の烟たぬ日に 同  
 稻刈るは父扱くは母這ふは子よ 同



稻刈るや稻子飛び込む野の茶店 子規

晩稻刈

脛に立つ水田の晩稻刈る日哉 同

晩稻刈る東海道の日和かな 同

掛稻

掛稻に鼠なくなる門田かな 蕪村

斗文か父の八十の賀をこと

ふくに申贈る

稻掛て風もひかさし老の松 同

掛稻や野菊花さく路の端 子規

掛稻に蠶とびつく夕日かな 同

谷あひや谷は掛稻山は柿 同

掛稻の上に短かし塔の先 同

掛稻や狐に似たる村の犬 同

掛稻や雨雲蔽ふ鴻の臺 同

稻扱

街道を尻に稻扱く女かな 同

稻蒔

雨雲に夕榮すなり稻蒔 同

稻舟

稻舟や穂麥の渚菊の岸 同

落穂

いたいて落穂拾はん關の前 芭蕉

油買ふて戻る家路の落穂かな 蕪村

越中の國

早稻

中々に落穂拾はずや尉と姥

同

落穂拾ひ日のあたる方へあゆみ行

同

新 藁

早稻の香や分け入る右は有磯海

芭蕉

粟

新藁の出そめて早き時雨哉

同

すしくもあら

杉の竹葉軒といふ庵を訪て

同

粟稗にまつしくもあらず草の庵

同

賀す

背戸の秋

よき家や雀よること背戸の粟

同

故郷や道せまくして粟垂るゝ

子規

粟畑や家遠くして小鳥網

同

行く馬の跡にうなづく粟か稗か

同

草鞋の緒結び居れば粟穂笠を打つ

同

露月君村居

粟の穂に鶏飼ふや一構

同

石手寺

通夜堂の前に粟干す日南哉

同

鳴子されて粟の穂垂るゝみのり哉

同

蕎麥の花

三日月に地は朧なり蕎麥の花

芭蕉







枯枝に麗龍見たり 蔦紅葉 蔦村  
打かへし見れば紅葉の蔦の裏 同

水晶巖 水晶の巖に蔦のにしき哉 子規  
並松や根はむしられて蔦紅葉 同

荻 荻の聲こや秋風の口うつし 芭蕉  
東寺を過るに 同

荻の露や頭をつかむ羅生門 同  
荻の聲いとさうとくしき男かな 蔦村

二見形文臺の讃 濱荻によせては浪の筆かへし 同  
濱荻にかくれて低し蟹か家 子規

芭蕉 茅舎の感 芭蕉野分して盟に雨を聞く夜哉 芭蕉  
此寺は庭一杯のはせを哉 同

物書くに葉裏をめつる芭蕉かな 蔦村  
隣から燈のうつる芭蕉哉 子規

さらくくと白雲起る芭蕉哉 同  
芭蕉翁笠塚 笠塚の笠を根にして芭蕉哉 同

思ふ事風になしたる芭蕉かな 同  
手燭袖に芭蕉の廊下通りけり 同

がさくと猫の上りし芭蕉哉 同  
芭蕉青く鶏頭赤き野寺哉 同

書 試に芭蕉の題字蘇子に擬す 同  
大寺の施餓鬼過ぎたる芭蕉哉 同

青厓と愚庵芭蕉と蘇鐵哉 同  
日飽すること八分芭蕉に風起る 同

屋根葺のごみ掃き落す芭蕉哉 同  
廻廊の曲りくくの芭蕉かな 同

青々と障子にうつる芭蕉哉 同  
石に觸れて芭蕉驚く夜半哉 同

破芭蕉 溪に近く亭あり芭蕉七八株 同  
書 鶴啼や其聲に芭蕉破れぬべし 芭蕉

芭蕉破れて繕ふべくもあらぬ哉 子規  
破れ盡くす貧乏寺の芭蕉哉 同

貧村に寺ひとつあり破芭蕉 同  
羯南氏住居に隣れば 同

敗 芭蕉破れて書讀む君の聲近し 同  
荷 さればこそ賢者は富ます敗荷 蔦村

蓮實飛 蓮の實のとんで地に入る思ひ哉 子規



蓮の實は飛びぬ馬見所は崩されぬ 子規  
 蓮の實を飛ばせて殺はしなびける 同  
 蓮の實の飛ぶや出離の一大事 同  
 笑ては飛び怒ては飛び蓮の實なし 同  
 蓮の實やとんで小僧の口に入る 同  
 極樂は蓮の實とんで月圓し 同  
 結跏こしに蓮の實のとぶ音聞かん 同

瓢

仲秋申一日

夕顔や秋はいろくの瓢哉 芭蕉  
 順禮の目鼻かき行く瓢かな 蕪村  
 四十にみだずして死んこそ  
 めやすけれ

あだ花にかゝる恥なし種瓢 同  
 腹の中へ齒はぬけいらし種瓢 同  
 人の世に尻を据えたる瓢かな 同  
 葉に蔓にいとほれ顔や種瓢 同  
 試に名をは巾着よくべ哉 子規  
 取付いて松にもひとの瓢かな 同  
 夕顔の愚に及ばざる瓢かな 同  
 子を育つ瓢を育つ如きかも 同

絲瓜

秋の燈の絲瓜の尻にうつりけり 同  
 牡丹にも死なす瓜にも絲瓜にも 同

病間に絲瓜の句など作りける 同  
 蔓枯れて絲瓜ぶらりと不二の山 同  
 目鼻かく絲瓜の顔の長さ哉 同  
 秋の色赤さへちまを書にかしむ 同  
 默然と絲瓜のさがる庭の秋 同  
 日掩棚絲瓜の蔓の這ひ足らず 同  
 成佛や夕顔の顔絲瓜の尻 同  
 病牀のながめ 同

棚の絲瓜思ふ所へぶら下る 同  
 草木國土悉皆成佛 同

絲瓜さへ佛になるぞ後るいな 同  
 西行に絲瓜の歌はなかりけり 同  
 辭世 (二句) 同

辭世句の内  
 句は夏絲瓜の  
 花の部にあり

西瓜

隅田川西瓜の皮の流れけり 子規  
 君來ばと西瓜抱えて待つ夜哉 同  
 船頭の西瓜を切るや涼み船 同  
 物も云はて喰ひ付たる西瓜哉 同  
 薄月夜西瓜を盗む心あり 同  
豊後渡邊某に寄す  
 南瓜の賦西瓜の簞や村夫子 同  
 切賣の西瓜喰ふなり市の月 同



赤行燈西瓜を切り七並べてけり 子規

捨てしある西瓜の皮や堂の前 同

西瓜燈籠

起し繪を照らす西瓜の燈籠哉 同

烏瓜

水車場をかこむ小藪や烏瓜 同

冬瓜

故人に逢て

冬瓜や互ひにかはる顔の形 芭蕉

南瓜

聖代

仇花の南瓜にならぬ許りなり 子規

芋

西行谷

芋洗ふ女西行ならば歌よまん 芭蕉

十人の家内や芋の十皿ほど 子規

盛り分つ十皿の芋や臺處 同

大家や芋を煮て居る臺處 同

元光院觀月會準備

夕飯は芋で喰ひけり寺男 同

閻汁

豚汁や芋を得て秋の季となりぬ 同

芋の子

芋の子や詠の日荒み轉げ落つ 同

三日月の頃より肥る子芋哉 同

悼仙風

手向けり芋は蓮に似たるとて 芭蕉

田家

芋の葉や月待つ里の燒はたけ 同

薯蕷

薯蕷つんで中島船の來りけり 子規

零餘子

菊の露落て拾へば零餘子哉 芭蕉

嬉しさの箕にあまりける零餘子哉 蕪村

蕪

朝川の蕪を洗ふ匂ひかな 子規

一束の葉生姜ひたす野川哉 同

牛蒡

牛蒡肥えて鎮守の祭近づきぬ 同

蜀黍

蜀黍や軒端の萩のとちちがへ 芭蕉

古寺に蜀黍を焚く暮日かな 蕪村

唐黍の殻てたく湯や山の宿 子規

黍殼や鷄遊ぶ土間の隅 同

高黍の上に短かき白帆哉 同

唐黍に脊中打たるし浴み哉 同

唐柜の上に見えたる小城哉 同



葡萄

勝沼や馬士は葡萄を喰ひながら  
 吹き下ろす妙義の霧や葡萄園  
 朱硯に葡萄の壳の散亂す  
 黒きまでに紫ふかき葡萄哉  
 生り初めし自家の葡萄を竹めけり  
 ほしいまゝに葡萄取らしむ葡萄園

初 茸

初茸やまた日數へぬ秋の露  
 初茸やもと來し道へ又出つる

茶 茸

茶茸得て歸る端山のしめぢ哉

松 露

茯苓は伏隠れ松露は露れぬ

茸

心にくら茸山越る旅路かな

宇治行

君見よや拾遺の茸の露五本  
 物の香の木の子あるべく思ふ哉

松 茸

松茸やかぶれた程か松の形  
 松茸や知らぬ木の葉のへばりつく  
 其匂ひ籠よりもるゝ松茸の  
 松茸や菊の胎の色に出づ

大きなる松茸に逢着す端山哉  
 松茸や思ひ出でたる故人の匂  
 連の者の松茸とりし妬み哉  
 松茸の捨つるに惜しさ籠の中  
 松茸飯

秋もはや松茸飯の名残かな  
 茸 狩

茸狩やあふない事に夕時雨  
 茸狩や似雲か鍋の煮ゆるうち  
 九茸と鴨瀧に遊ぶ

茸狩や面を擧れば峰の月  
 茸狩や鳥啼いて女淋しがる  
 我聲の風になりけり木の子狩

茸狩や浅き山々女づれ  
 茸狩山浅くいくちばかりなり

枝 豆  
 枝豆や病の床の晝永し  
 枝豆や俳句の才子曹子達

芋あり豆あり女房に酒をねたり  
 芋を喰はぬ枝豆好きの上戸哉

枝豆のつまめは彈く仕掛哉  
 枝豆や三寸飛んで口に入る

學校に往かす枝豆賣る子哉  
 枝豆の月より先きに老いにけり



落 椒

木曾塚の森庵に在て敲戸の  
人々に對す

草の戸を<sup>かきさめ</sup>知れや穂蓼に唐辛子  
かくさぬそ宿は菜汁に唐辛子  
大風のあしたも赤し落椒  
同 芭蕉

深川夜遊

青くてもあるべきものを唐辛子  
氣みじかに秋を見せけり唐辛子  
依して藏め貯へぬ唐辛子  
錦木を立ぬ垣根や唐辛子  
御園守る翁が庭や落椒  
餉に辛き涙や落椒  
美しや野分のあとの落椒  
同 同 同 同 同 同 同

角力の讃

いろくの秋や小錦唐辛子  
落椒稍ひんまがつて納辛し  
唐辛子残る暑さをほのめかす  
添竹を殘して赤し唐辛子  
同 同 同 同 同 同 同  
自題  
落椒長廣舌をちいめけり  
鉢植の落椒喰ふ世帯かな  
盆栽の數に入けり唐辛子  
はらわたに通りて赤し落椒  
同 同 同 同 同 同 同

唐辛子日にく秋の恐ろしき  
同 秀調死せしよし

悪の利く女形なり唐辛子  
同

唐辛子心ありける浮世かな  
同

雨風にますく赤し唐辛子  
同

東髪の人に喰はせん落椒  
同

唐辛子一つ二つは青くあれ  
同

鬼 燈

鬼灯は實も葉もからち紅葉哉  
芭蕉

鬼灯や清原の女か生寫し  
蕉村

鬼灯を鳴らしやめたる唱歌哉  
子規

鬼灯をほろと吹たる禿かな  
同

罌粟子

幾秋の迫りて罌粟子に隠れけり  
芭蕉

草の實

草の實や笠かさばははほろくと  
子規

蔓草を引けはしたしか實の落る  
同

毒草の美しき實を結ひけり  
同

草の實の赤くして馬も喰はざりき  
同

千里か舊里にて

綿弓や琵琶になくさむ竹の奥  
芭蕉

日常りや綿も干し猫も寐る戸口  
同

綿 摘

綿摘や煙草の花を見て休む  
蕉村



綿

綿とりや犬を家路に追返し

燕村

洪水のあとに収るべき綿もなし

子規

若燵草

盡みて下葉ゆかしき燵草哉

燕村

掛煙草

あら壁や蟬老て掛煙草

子規

末枯

末枯や家をめぐりて醜酬道

燕村

末枯の中に道ある照葉かな

同

うら枯やからき目見つる漆の樹

同

末枯るし杉の下道齒朶菰

子規

末枯に人を恐れぬ狐かな

同

雜

雨の日や世間の秋を塚町

世蒸

後家の秋物の哀れをとくめけり

同

深川の庵を旅立として

同

秋十とせ却て江戸をさす故郷

同

さらしてさへ秋よ野寺の一つ鐘

同

鹿島社前

同

此松の實生せし代や神の秋

同

留別

同

送られつ送りつ果は木曾の秋

同

種の濱にて

同

さひしさや須磨に勝たる濱の秋

同

相蝶にもならて秋經る菜虫哉

同

何くふて小家は秋の柳かけ

同

小名木澤桐奚興行

同

秋に添て行かはや末は小松川

同

車府亭

同

主は夜遊ふ事を好て朝寐せ

同

らるゝ人なり宵寐はいやし

同

く朝寐はせわし

同



面白き秋の朝寐や亭主ふり

芭蕉

信濃なる坂木の横吹といふ

所に乞食の寐たるを見て

あきなく起は浮世の秋を見ん

秋さひし編笠着たる人の形

有 蘭 草 菊 宜 止

とめる氣と見えて秋から火燧哉

蕪村

追剝を弟子に剝けり秋の旅

古人移竹を思ふ

去來去り移竹移りぬ幾秋ぞ

秋たましく躑躅花さく志賀の里

打よみて後住ほしがる寺の秋

故人に別る

木曾路行ていざ年よらん秋一人

秋の灯やゆかしき奈良の道具市

野路の秋我が後より人や來る

身の秋や今宵をしのぶ翌もあり

茨老ひ芒瘦せ萩覺東な

ひとり大原野のほとり吟行

しけるに田疇荒蕪して千く

さの下葉霜をしのぎつれな

き秋の日影をたのみてはづ

かに花咲出たるなどことに

あはれ深し

妙義山

立去ること一里眉毛に秋の峰寒し

汽車の窓に首出す人や瀬田の秋

行く我に留る汝に秋二つ

傳教大師讃

此柚や秋を定めて一千年

親鸞上人讃

御連枝の末まで秋の錦かな

白き馬に召したる殿御見まが秋

深體書の鏡に映る朝の秋

夕顔と丝瓜殘暑と新涼と

秋一室拂子の舞の動きけり

病間あり秋の小庭の記を作る

題美人畫

羅の秋に勝へざる姿かな

くわらくと何に火をたく秋の村

氷嚙んで毛穴に秋を覺えけり

大坂青々に酬ゆ

奈良漬の秋を忘れぬ誠哉

病牀の財布も秋の錦かな

順禮に道ひ越されけり秋の旅

家主か植て呉れたる松の秋

風を秋とさく時ありて犬の骨



水涵々蓼かあらぬか蓆菱か否か 子  
 象潟の姿を見れば秋なりける 同  
 面白や秋の錦をほととぎす 同  
 病起杖によれば千山萬嶽の秋 同  
 西東山にかたよる奈良の秋 同  
 いのちありて今年の秋も涙かな 同  
 砂の如き雲流れ行く朝の秋 同  
 即事  
 枕にす俳句分類の秋の集 同  
 鶯落ちてひとり拂子に對す秋 同

秋之部 終



天文

冬 空

我爲に日はうらしなり冬の空 世 蕪

冬日影

硝子越に冬の日あたる病間かな 子 規

冬の日の落て

冬の日や馬の背中に落かいる 同

冬の日や入りて明るし城の松 同

冬の日のおたらずなりし乾飯哉 同

冬の日の小藪の隅に落にけり 同

冬の月 静かなる樅の木原や冬の月 蕪 村

ひとり来てひとりを訪ふや冬の月 同

石となる樟の梢や冬の月 同

木の影や我影動く冬の月 子 規

子を捨つる女と見ゆる冬の月 同

魚河岸や鮫に霜置く冬の月 同

家根の上に火事見る人や冬の月 同

冬—天文



寒月や鋸山のあからさま 蕪村  
 寒月や枯木の中の竹三竿 同  
 寒月に木を割る寺の男かな 同  
 寒月や門を叩けば沓の音 同  
 寒月や小石のさばる沓の底 同  
 寒月や衆徒の群議の過後 同  
 寒月や門なき寺の天高し 同  
 寒月や開山堂の木の間より 同  
 寒月や僧に行逢ふ橋の上 同  
 寒月や雲盡きて猶風烈し 子規  
 寒月や石塔の影杉の影 同

初時雨

人の許へはしめて行きて

初しくれ初の字を我時雨哉 芭蕉

はやこなたへといふ露のむ

くらの宿はうれたくとも袖

をかたしさておとまりあれ

や旅人

旅人と我名よはれん初時雨 同

伊賀の山中

初時雨猿も小装をほしけなり 同

初時雨都にわたれ桂川 同

許六亭にて

けふ許り人も年よれ初時雨 同

自書讀

寺開く坊主の形や初時雨 同

渡しよぶ人は我なり初時雨 同

初時雨眉に烏帽子の雫かな 蕪村

絶々の雲しのびずよ初時雨 同

蓑虫の得たりかしこし初時雨 同

買うて来る釣瓶の底や初時雨 子規

路次口に油こぼすや初時雨 同

鶏頭を剪るにもものらし初時雨 同

山本の里と申して初時雨 同

旅人の京に入る日や初時雨 同

時雨

村時雨てれふれ町の名なるへし 芭蕉

行雲や犬の逃げえ村時雨 同

いつく時雨傘を手に提て歸る僧 同

火吹竹音や時雨れて小豆飯 同

后田權太夫亭

一しくれ磯や降て小石川 同

道のほとりにて時雨に逢う

て

笠も我を時雨るいかは何と 同

桐葉のぬし志淺からざりけ

れは暫くといまらんとせし

程に

我を時雨るい  
河と川



袖つたに

一屋根は  
富士の山

此海に草鞋を捨てん笠時雨  
草枕犬もしくるしか夜の聲  
時雨行くや船の帆綱にとりつきて  
鶏の聲にしくるし牛屋哉  
一尾根は時雨るし雲か富士の雲

芭蕉  
同  
同  
同  
同

美濃垂井宿矩外かもとに冬

作り木の庭をいさめる時雨哉

同

こもりして

舊里の道すから

同

時雨るしや田のあら株の黒むほど

同

島田驛塚本か家に到る

宿かして名をなのらす時雨哉

同

宿かりて

馬士は知らし時雨の大井川  
山城へ井出の駕かる時雨哉

同  
同

草庵

人々をしくれし宿はむさくとも

同

寒くとも  
又寒けれど

手つから雨の危笠をばりて

世に降るもさらに宗祇の時雨哉

同

時雨降笠松へつく日なりけり

同

船頭の妻迎へたるしくれ哉

同

時雨降る柳の脊戸や草の道

同

上野から時雨て来るや車坂

同

高の葉の時雨に時雨降夜哉

同

石に置て香爐をぬらす時雨哉

同

世の中は更に  
宗祇の宿り哉  
此句は宗祇の  
「世にふるは  
さらに時雨の  
やとり哉」と  
り出す

小倉山

こゝに來て假初ならぬ時雨哉

同

草の戸や我もの顔にふる時雨

同

夕時雨墓ひそみ音に愁ふかな

同

古傘の娑婆と月夜の時雨かな

同

驚ぬれて鶴に日のさす時雨かな

同

子をむすぶ竹に日くるし時雨かな

同

もの負て壁田へ歸る時雨かな

同

鶯の竹に來初て時雨けり

同

浪花遊行寺にて芭蕉息をい

となみける二柳庵に

蓑笠の衣鉢つたへて時雨かな

同

禪林の廊下うれしき時雨かな

同

禪寺の廊下たのしめ北時雨

同

海棠の花は咲すや夕時雨

同

半江の斜日片雲の時雨哉

同

榎時雨して淺間の煙餘所に立つ

同

又嘘を月夜に釜の時雨かな

同

題朝時雨

雲のひまに夜は明て猶時雨かな

同

違かれて池淺ましき時雨かな

同

時雨るしや我も古人の夜に似たる

同

下戸ならぬこそ宵々の時雨かな

同

時雨るしや鼠のわたる翠の上

同

時雨るし月夜  
かな

もの匿て



芭蕉忌

時雨音なくて昔に昔をしのぶかな 蕪村  
 時雨るゝや蓑買ふ人のまことより 同  
 楠の根を静にぬらす時雨かな 同  
 蓑蟲のふらと世にふる時雨かな 同  
 時雨るゝやとある所に鷺一つ 同  
 子をつかふ狸もあらむ小夜時雨 同  
 常軒に年ふる時雨かな 同  
 朔日の城かしましき時雨かな 同  
 時雨るゝや長田が館の風呂時分 同  
 目前を昔に見する時雨かな 同  
 時雨るゝや用意かしたき傘二本 同  
 深草の笠しのばれぬ時雨かな 同

几董會當座時雨

老が懸忘れんとすれば時雨かな 同  
 虹竹に手向侍る 同  
 來迎の雲をはなれて時雨かな 同  
 水際もなくて古江の時雨かな 同  
 窓の灯の佐田はまた寐ぬ時雨かな 同  
 釣人の情のこはさよ夕時雨 同  
 手にとらじとても時雨の古草鞋 同  
 化けさうな傘かす寺の時雨かな 同  
 鹽わかる上をからくも行く時雨 同  
 一渡しおくれて人にしくれかな 同

赤き

鶏頭の黒きにそしぐ時雨哉 子規  
 時雨してねぢけぬ菊の枝もなし 同  
 夕鴉一羽おくれて時雨けり 同  
 松に時雨杉に雫なく夕日かな 同  
 稱名の聲にしぐるゝ野寺かな 同  
 稻かけて神南村の時雨かな 同  
 土佐の海南もなしに時雨けり 同  
 牛一つ見えて時雨るゝ尾上かな 同  
 しぐるゝやいつ迄青き鳥瓜 同  
 傘曲る喰物横町小夜時雨 同  
 馬糞のからびぬはなし村時雨 同  
 さそひうつ五山の鐘や夕時雨 同  
 鳥鳶をかへり見て曰く時雨れんか 同  
 病中  
 しぐるゝや蒟蒻冷えて臍の上 同  
 小夜時雨上野を虚子の来つゝあらん 同  
 時雨るゝや腰湯ぬるみて鴈の聲 同  
 錦木は倒れしまゝに夕時雨 同  
 吊柿の二筋三筋しぐれたり 同  
 嘈々としぐるゝ音や四つの絲 同  
 新宿に荷馬ならぶや夕時雨 同  
 入獄者に 同  
 世の中は時雨るゝに君も瘦せつらん 同  
 鴨立庵の圖に題す 同



西行も虎も時雨ておほしけり  
面白や富士に取りつく幾時雨  
しぐるしや雞頭黒く菊白し  
しぐるしや紅薄き薔薇の花  
出女の聲に降り出す時雨かな

訪愚庵

浄林の釜にむかしを時雨けり  
老ひぼれし嘴ひつゞ犬を時雨けり

冬の雨

鳴海鍛冶出羽守氏雲亭にて

面白し雪にやならん冬の雨

寒の雨

雁さわぐ鳥羽の田面や寒の雨

皇太后崩御

廢朝や馬も通らす寒の雨

初雪

我草の戸の初雪見んと餘所

にありても急ぎ歸る事あま

たしひなりけるに師走八日

初めて雪降けるよるこび

初雪や幸庵にまかりある

奈良大佛再興

初雪やいつ大佛の柱立

初雪や聖小僧の笈のいる

たわむほど

深川大橋半はかきりける時  
初雪や掛かきりたる橋の上  
初雪や水仙の葉のたわむまで

雪の日に

又雪の中

叩かは

山中に子供と遊びて

初雪に兎の皮の罷つくれ

初雪に上京の人よかりけり

初雪の底を叩て竹の月

初雪や消ゆればぞ又草の露

初雪をよるへば藪の雫かな

初雪や海を隔て、何處の山

初雪やされいに笹の五六枚

時雨をやもどかしかりて松の雪  
あられ交る帷子雪は小紋哉  
黒森を何といふともけさの雪  
子に後れたる人の許にて

大雪

しほれふすや世は逆まの雪の竹

笠の緒や咽喰しむる富士の雪

雪の日や羅紗の羽織にたいさ精

今朝の雪根深を園の梨哉

雪の竹笛作るへう節あらん

雪の朝ひとり千鯉を嘴得たり

湖水から光り出しけり比良の雪

寒山自書讚



庭掃て雪を忘るし箒かな 芭蕉

閑居

酒のめばいと寝られぬ夜の雪 同

小町の書讀

雪さや雪ふらぬ日も幾と笠 同

草庵に士あり

木枕の油拭ふや夜の雪 同

抱月亭

市人にて是うらん雪の笠 同

杜國亭にて中あじき人の事

なととりつくろひて

雪とゆきこよひ師走の明月か 同

箱根こす人もあるらし今朝の雪 同

旅人を見る

馬をさへ眺むる雪のあした哉 同

信濃路を過る

雪散るや穂屋の芒の刈残し 同

智月の許にて

少將の尻のはなしや志賀の雪 同

湖水眺望

比良三上雪さしわたせ鷺の橋 同

日頃にくむ鴉も雪のあした哉 同

比良暮雪

さそへ雲白衣の天狗比良の雪

かけわたせ  
常情心

香を

雪の日にひる顔枯れぬ日蔭哉 同

其儘に折らはや折らん松の雪 同

雪寒し馬にもものらぬ我身哉 同

茶臼に眠る子の書讀

積れくくとく起て見ん夜の雪 同

竹の雪落ちて夜なく雀哉 同

雪降や乞食なかめて居る乞食 同

雪白しいかさま三保の冬なれや 同

愚に耐よと窓を暗す雪の竹 同

風呂入に谷へ下るや雪の笠 同

木屋町の旅人とはん雪の朝 同

邯鄲の市に鮫見る雪の朝 同

いさり火の焼残しけん岩の雪 同

樂書の壁をあはれむ今朝の雪 同

雪の且母家のけふりめてたさよ 同

水と鳥の昔語りや雪の友 同

雪の戸に格をあて行木履かな 同

焚火して鬼こもるらし夜の雪 同

年ひとつ積もるや雪の小町寺 同

雪國や糧たのもしき小家かち 同

うつみ火や我かくれ家も雪の中 同

烈々と雪に秋葉の焚火哉 同

雪白し加茂の氏人馬でうて 同

漁家寒し酒に頭の雪を焼 同



雪の暮鴨はもとつて居るやうな 燕  
 山里や雪にかしこき白の音 同  
 繫馬雪一双のあぶみかな 同  
 嵐雪に蒲團着せたり雪の宿 同  
 雨の時食しき蓑の雪に富めり 同  
 住吉の雪にぬかづく遊女かな 同  
 一二寸降もて行くや雪千里 同  
 鍋さけて淀の小橋を雪の人 同  
 宿かさぬ火影や雪の家つゝき 同  
 金殿の燈火細し夜の雪 子  
 杉の雪一丁奥に仁王門 同  
 松の雪われて落ちけり水の中 同  
 學寮へつゝくや雪の道一つ 同  
 水汲むや雪の合羽の女とは 同  
 風そうて木の雪落る夜半の音 同  
 五六人熊擔ひ来る雪の森 同  
 合羽つゞく雪の夕の石部かな 同  
 鴛鴦の羽に薄雪つもる静かさよ 同  
 勘當の子を思ひ出す夜の雪 同  
 雪の日や白帆きたなき淡路島 同  
 灯のともる東照宮や杉の雪 同  
 富士の山雪盛り上げし姿かな 同  
 降りやむや雪に灯ともる峰の堂 同  
 雪の夜や蓑の人行く遠明り 同

ばかりにて

雪の家に寝て居ると思ふばかりなり 同  
 小塵頭のたはれ可笑しや雪礫 同  
 藁頭巾の雪振ふたる戸口かな 同  
 隠れ住む古主を訪ふや雪の村 同  
 辻堂に火を焚く僧や夜の雪 同  
 えい／＼と攻め寄る雪の岩かな 同

病中二句

雪ふるよ隙子の穴を見てあれば 同  
 幾度も雪の深さを尋ねけり 同  
 雪の脚竇永山へかゝりけり 同  
 移徒やきのふ植たる松の雪 同  
 第一は雪なり第二炬燵なり 同  
 遠東の雪に馴れたる軍馬哉 同  
 とん／＼と叩けば落る門の雪 同  
 一ツ葉の手柄見せけり雪の朝 同  
 小娘にさしかけやらん雪の傘 同  
 明石から雪に暮れ行く淡路島 同  
 つらなりていくつも丸し雪の岡 同

芳原詞の内

居つゞけに禿は雪の兎かな 同  
 雪見 同

夜着は重し吳天に雪を見るあらん 芭  
 去年のわひ寐を思ひ出でし 蕉  
 越人におくる



いと行かん

二人見し雪は今年も降けるか  
いとさらば雪見に轉ふ所まで  
ぬれ装を手柄にしたる雪見哉  
いと雪見容す装と笠

深雪

戀な飛脚過行く深雪哉  
雪深し熊を誘ふ阱

大雪

大雪や婆一人住む藪の家  
大雪や上客歩行ていりおはす  
大雪となりけり關のとさし時  
大雪や關所にかゝる五六人  
大雪になるや夜討も終に來ず  
大雪や石垣高き淀の城

雪待

耕月亭  
雪をまつ上戸の顔やいな光り

竹の讀

たわみては雪待竹のけしと哉

雪圍

庵にうつりて

雪の雲

深川や根こしの芭蕉雪かこひ

鳴海養言亭にて

京までとはまた半空や雪の雲

雪模様

笹の葉の亂れ具合や雪模様  
しばらくは笹も動かず雪模様

熱田御修覆

磨き直す鏡も清し雪の花  
浪の花と雪もや水に歸り花

雪女旅人雪に埋みけり

雪の原  
丈低き夷の家や雪の原  
一つ家の燈火低し雪の原

雪折  
雪折や吉野の夢のさめる時

題七步詩

雪折や雪を湯に焚く釜の下  
雪折も聞えて暗き夜なりけり

雪丸



會良何かしは此あたり近く  
假に居をしめて朝な夕な訪  
つとはる我喰ものいとなむ  
時は柴折くふる助となり茶  
を煮る夜は来て軒をたしく  
情隠閑を好む人にてましは  
りこかねを斷つ或夜雪に訪  
れて

吹雪 君火たけよき物見せん雪丸け

世 燕

宿借せと刀投げ出す吹雪かな  
南天に雪吹きつけて雀なく  
町近く来るや吹雪の鹿一つ  
千鳥なく灘は百里の吹雪哉  
馬の尻雪吹きつけて哀れなり  
病む人に戸あけて見する吹雪哉

爨

同 同

爨けり

古池に草履洗みて爨かな  
大船の梯子を上げる爨かな  
棕櫚の葉のばさりくと爨かな  
瀬の橋杭つたふみぞれかな

霰

同 同

あかさん  
又ありかせん

いさ子供走りありかん玉霰  
石山の石にたはしるあられ哉

同 世 燕

自書自讃

いかめしき音や霰の槍笠  
膳所の草庵を人に訪はれけ  
る時

同

霰せよ網代の氷魚を煮て出さん  
與或人

同

冬しらぬ宿や扱する音霰  
如行亭にて

同

琵琶行の夜や三絃の音あられ  
再世蕉庵を造營みて

同

嵐哉として概  
續に里圖の  
作とあり

あられ開や此身はもとの古柏  
いさみ立鷹引すうる霰哉  
雑炊に琵琶さく軒の霰哉  
柀の葉にはね返る霰かな  
物やあらん人や霰の板庇  
玉霰漂母か鍋を亂れうつ  
一しきり矢種のはれぬ霰かな  
深草の笠しのはれぬ霰かな  
初雪の出来そこなうて霰かな

同 同 同 同 同 同 同 同

長頭丸が風調に倣ふ

よい種を摩訶迦羅衣より玉霰  
糞灰にまぶれて了ふ霰かな  
甲板に霰の音のくらす哉  
板扉に寄りもつかれぬ霰かな

同 同 同 同



陣笠のそりや狂はん玉霞  
 口ごはさ馬に乗りたる霞かな  
 同 同  
 から城に鶴さわぐ霞かな  
 同 同  
 鍋焼の行燈をうつ霞かな  
 同 同  
 鶴の巢を傾けて降る霞かな  
 同 同  
 鶯の子の兎をつかむ霞かな  
 同 同  
 吳竹の奥に音ある霞かな  
 同 同  
 四絃一齊霞たばしる曇かな  
 同 同  
 降る程の霞かくれて小石原  
 同 同  
 八陣の石は崩れて霞かな  
 同 同

木 枯

名護屋に入る道の程

狂句木枯の身は竹齋に似たる哉

竹の書識

木枯や竹にかくれて静まりぬ

木枯や頬腫いたむ人の顔

三河新城の家土音沼標右衛門

門宅

京に倦て此木枯や冬住居

風來寺に參籠して

木枯に岩吹とかる杉間哉

木枯の吹やるうしろ姿哉

木枯や何に世わたる家五軒

木枯やひたとつまづく戻り馬

子規

世燕

同 同

同

同

同

同

同

村

木枯や野河の石をふみわたる  
 同 同  
 木枯や廣野にどろと吹起る  
 同 同  
 木枯や小石のこける板庇  
 同 同  
 木枯や鐘に小石を吹あてる  
 同 同  
 木枯や島の小石目に見ゆる  
 同 同

大魯が兵庫の穂栖を几童と

ともに訪ひて人々と海邊を

吟行しけるに

木枯に腮吹るゝや鉤の魚

木枯や炭賣一人わたし舟

木枯や釘の頭を戸に怒る

木枯や此頃までは萩の風

木枯や岩に裂け行く水の聲

木枯やあら緒くひ込む菅の笠

木枯や鐘ひきすすてし道の端

君待つ夜又木枯の雨になる

木枯や大佛殿は驛なり

木枯や杉葉吹き散る能舞臺

木枯や三河島菜の葉張りかな

木枯よまのの方に鍛冶の音

木枯や鯛乏しき鯛網

木枯や暖室の花紅に

木枯や病の舌に梨子の味

愚庵和尚に寄す

規

同

同

同

同



木枯の淨林の釜蒸なきや  
 木枯や瀟々として瀟落つる  
 木枯やよろ／＼と  
 木枯や夜着着て町を通る人  
 用や葎を楯の家鴨二羽  
 吉御所や木枯更けて笑ひ聲  
 木枯や枯色見する塔ひとつ  
 琵琶追れば木枯さつと燭を吹く  
 木枯や芭蕉の古葉吹き盡くす  
 木枯や犬吠えたつる外が濱

小川博言博士の臺灣に赴く  
 を送る

君が行くは木枯ふかぬ所かな  
 風夜を荒れて虚空火を見る淺間山  
 木枯やちぎつて捨つる不二の雪  
 木枯や笹は餘計にゆれながら  
 用や燈爐にいもを焼く夜半

北風  
 北風に鍋焼温飩呼びかけたり

時候

今朝の冬

今年よき  
 寒得たりけり

百姓に花瓶うりけり今朝の冬  
 今朝の冬よき毛衣を得たりけり  
 冬に入る

紅線の仙臺に歸るを送る

冬に入りて柿猶澁し此心  
 子規

立冬  
 冬立つや立たずや留守の一家  
 同

初冬  
 初冬や訪はんと思ふ人來り  
 初冬や日和になりし京はづれ  
 初冬に香花いとなむ穢多か宿  
 初冬の萩も芒もたばねけり  
 初冬の月裏門にかゝりけり  
 初冬の家ならびけり須磨の宿

冬の日

冬の日や馬上に凍る影法師  
 冬の日短かけれとも石部迄  
 子規

冬の夜



鋸の音食しよよ夜半の冬 蕪村  
飛驒山の質屋とよしの夜半の冬 同  
人を噛む鼠出てけり夜半の冬 子規

寒 夜 我を厭ふ隣家寒夜に鍋を鳴らす 蕪村

寒 乾鮓も空也の瘦も寒の中 芭蕉  
月花の愚に鍼立てん寒の入 同

池下の茶店にて  
松葉を焚て手拭あふる寒さ哉 同  
越人と吉田の驛にて  
寒むけれと二人旅寐を頼もしき 同

元起和尚より酒をたまはり  
ける返しに奉りける

鳳來寺に参籠して  
水寒く寐入りかねたる鴨哉 同  
綿弓や窓に入る日のかげ寒さ 同

夜着ひとつ祈り出したる寒さ哉  
鹽鯛の齒くさも寒し魚の店 同

仙化か父の遺書  
袖のいろよこれて寒し濃鼠 同  
葱白く洗ひ立てたる寒さ哉 同  
によさくと帆柱寒き入江哉 同

上げたる

冬寒し欠びをうつす息の色 同  
狼の人に喰はるゝ寒さ哉 同  
木曾殿と脊中合せの寒さ哉 同

寺寒く櫛はみこぼす鼠かな 蕪村  
易水に葱流るゝ寒さかな 同  
眞金はむ鼠の牙の音寒し 同

雪舟の不二雪信が佐野何れか寒さ 同  
借具足我になじまぬ寒さかな 同  
井のもとへ薄刃を落す寒さかな 同

水鳥も見えぬ江渡る寒さかな 同  
皿を踏む鼠の音の寒さかな 同

大魯が病の復帯を祈る  
瘦歴や病より起つ鶴寒し 同

泰里が東武に歸るを送る  
嗟峨寒しいさ先くだれ都鳥 同  
牙寒き梁の月の鼠かな 同

蕎麥屋出て永阪上る寒さかな 子規  
大船の中を漕ぎ出し寒さ哉 同  
半焼の家に人住む寒さかな 同

寒き日を穴八幡に上りけり 同  
狼の糞見て寒し白根越 同  
御格子に切髪かゝる寒さかな 同

梅檀の實ばかりになる寒さかな 同  
冬川の涸れて蛇籠の寒さかな 同

かくる



貧しさは火に焚く木佛さへ  
もなければ

寒き日を土の達磨に向ひける  
ほつちりと味噌皿寒し膳の上  
山城に眺まれて居る寒さかな  
酔さめの車に乗れば足寒し  
山風にほろと立つたる寒さ哉  
うねくと元山寒し三河道

碧梧桐痘を患ひたるに

寒からう痒からう人に逢たかろ  
寒さうな外の草木や硝子窓  
星あちて石となる夜の寒さ哉  
雲なくて空の寒さよ小山越  
蠟燭の涙を流がす寒さかな  
苦るし寒し風を呑み込む阪の上  
寒燈明滅小僧すよくと寐入り危  
劍に舞へば蠟燭寒き酒宴かな  
見あげたる高石かけの寒さ哉  
水涸れて橋行く人の寒さ哉

送別

此の寒さ君に別るゝあしたより  
灯を置かね狂女が部屋の寒さ哉  
箱根来て富士に並びし寒さ哉  
深川は埋地の多き寒さかな

冷たさ

日のおたる石にさはれば冷たさよ

冬の東京淺草區

白石の墓のつめたき無縁哉

凍

深川冬夜の感

櫓の聲浪を打て腸凍る夜や涙

あまつ繩手にて

すくみ行や馬上に凍る影法師

霍英は一向宗にて信ふかき

おのこなりけり愛子を失ひ

て悲みに堪えず朝暮佛につ

かふまつりて讀經おこたら

ざりければ

蠟燭の涙氷るや夜の鶴  
氷る燈の油うかきふ鼠かな  
灯し行く灯や凍らんと彌宜が袖  
靴凍て墨ぬるべくもあらぬ哉  
星満つる胡北の空や角凍る  
頬凍て兒の歸り来る夕餉かな  
道凍て、跣足参りの通りけり  
凍えたる手をあぶりけり弟子大工  
凍る手や菜の總の紅に  
凍え死ぬ人さへあるに猫の戀

子規

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

世

同

燕

同

子

同

同

同

同

同

同



染汁の紫凍る小溝かな 子規  
 割下水きたなき水の凍りけり 同  
 田の泥に雁の足跡凍りけり 同  
 北庭の踏む人もなく凍てし哉 同  
 凍筆を火屋にかざして焦しけり 同  
 土凍てゝ愛宕の山や吹さらし 同  
 土凍てゝ南天の實のこぼれけり 同  
 諏訪の湖不二の影より凍りけり 同  
 鐘凍る 同

上野公園

狸々の三七日頃や鐘凍る 同  
 夢十二ヶ月の内

たらしねの夢に泣く夜や鐘凍る 同  
 月凍 同

驛遠く月凍る夜をいとさけり 同  
 冴

琵琶冴て星落ち来る臺かな 同  
 冴る夜の北斗をこぼす狼煙哉 同  
 星冴て篝火白き砦かな 同

鐘冴 冴  
 鐘冴る夜かかげても灯の消んとす 同

冬寂 寂  
 草庵 同  
 冬さひぬ藏澤の竹明月の書 同

冬おれ

高僧者

冬おれや北の家蔭の葦を刈 蕪村  
 冬おれや小鳥のあさる葦鳥 同  
 冬おれて葦の葉喰ひけり 同

佐倉

常盤木や冬おれまさる城の跡 子規  
 冬おれや水なき川の橋長し 同  
 冬おれや狐も喰はぬ小豆飯 同  
 冬おれや稻荷の茶屋の油揚 同  
 冬おれや石臼残る井戸の端 同  
 冬おれや石燈籠の鳥の糞 同

冬枯

冬枯や世は一色に風の音 芭蕉  
 冬枯の磯にけさ見るとさか哉 同  
 枯立や伊駒か嶽の松はかり 同  
 冬枯の垣根に咲くや薔薇の花 子規

皇太后崩御

冬枯に漏れ玉はぬぞ是非もなき 同  
 冬枯や熊祭る子の蝦夷錦 同  
 はらわたの冬枯て只發句かな 同  
 冬枯や庚申堂の小豆飯 同

愚庵十二勝古松塙

冬枯や曰く庭前の松樹子 同  
 冬枯や奈良の小店の鹿の角 同



冬枯やはるかに見ゆる真間の寺 子規  
 冬枯や燦爛として阿房宮 同  
 冬枯のままや芭蕉も義仲も 同  
 冬枯て馬鹿も利口もなかりけり 同  
 冬枯や巡査に吠ゆる里の犬 同  
 冬枯や蛸ぶら下る煮賣茶屋 同

袋井

冬枯の中に家居や村一つ 同  
 冬枯や繪の鳥山の貝屏風 同

小春

月の鏡小春に見るや目の正月 芭蕉

うかふ瀬に遊びてむかし柏  
 遊が此處にての狂句を思ひ

出て其風調に倣ふ

小春風眞帆も七合五勺かな 蕪村  
 水草の花に小春の西日かな 子規  
 小春野や草花瘦せて豊の月 同  
 賣出しの旗や小春の廣小路 同  
 小春日や南を追ふて蠅の飛ぶ 同  
 瘦村に見ゆや小春の風巾 同  
 窓の影小春の蜻蛉稀に飛ぶ 同  
 木枯を抜け出て山の小春哉 同  
 屋の棟に鳩ならび居る小春哉 同  
 大寺の縁廣うして小春かな 同

冬の東京四谷區

繚纒を乾す小春日和や鮫ヶ橋 同  
 野の茶屋に蜜柑並べし小春哉 同  
 縁に足のべて文かく小春かな 同  
 廻廊に餓の落ちたる小春哉 同  
 煙草十二ヶ月の内 同  
 百姓の煙草輪に吹く小春哉 同

病後

蜻蛉に馴るゝ小春の端居哉 同  
 菊も菜の色に咲きたる小春哉 同  
 畑の木に鳥籠かけし小春哉 同  
 下總に一日遊ぶ小春哉 同  
 小六月 同

牛の子や賣られて遊ぶ小六月 同  
 のびくし歸り詣や小六月 同  
 日影さす人形店や小六月 同  
 圍かけて人居らぬ野や小六月 同  
 神無月 同

宗任に水仙見せよ神無月 蕪村  
 鳥居より内の馬糞や神無月 子規

霜月 同  
 霜月の梨子を田町にもとめけり 同

冬至 同  
 新右衛門蛇足を誘ふ冬至かな 蕪村



書記典主故園に遊ぶ冬至かな

蕪村

物干の影に測りし冬至かな

子規

佛壇に水仙活けし冬至かな

同

煙草十二月の内

巻貫くゆり盡くせし冬至哉

同

佛壇の菓子美しき冬至かな

同

次郎月

去年ははやそこへすされよ次郎月

世燕

師走

月白き師走は子路が寐覺哉

同

十二月九日一井亭

旅寐よし宿は師走の夕月夜

同

五百丸へ元服の祝として

春や立また春を見ん此師走

同

何に此師走の市に行鴨

同

かくれけり師走の海のかいつより

同

雨霰雪も氷も師走哉

同

炭賣に日の暮かゝる師走かな

蕪村

鶯の鳴や師走の羅生門

同

蜂辨ひとつ障子に羽うつ師走かな

同

海廣し師走の町を出離れて

子規

傾城を見たる師走の温泉かな

同

夕霧より伊左さま参る師走哉

同

玉孫を市にあはれむ師走かな

同

年の暮

なりにけりくまで年の暮

芭蕉

わすれ草菜飯につまん年の暮

同

みな拜め二見の注連を年の暮

同

年暮れぬ笠着て草鞋はきながら

同

乞てくらひ貰ふてくらひさ

すかに年の暮ければ

同

めてたき人の數にも入ん老の暮

同

月雪とのさばりけらし年の暮

同

魚鳥の心は知らず年の暮

同

年の暮線香買に出てはやな

同

古郷や隣緒になく年の暮

同

盗人に逢ふた夜もあり年の暮

同

給のいける甲斐あれ年の暮

同

分別の底たしきけり年の暮

同

電の戸棚もあるや年の暮

蕪村

題沓

石公へ五百目戻す年の暮

同

首くしる繩切もなし年の暮

同

笠着て草鞋はきながら

芭蕉去てとのち未だ年くれず

同

馬に乗る嫁入見たり年の暮

子規

風吹いて今年も暮れぬ土佐日記

同

年の暮乞食の夢の長閑なり

同

月花とまわり  
響りし  
年忘れ  
年の市

ある



行年

行年や薬に見たき梅の花 芭蕉

書讀

行年や汝か親の小松うり 同

行年の女歌舞伎や夜の梅 蕉村

行年のめさまし草や茶釜賣 同

行年の瀬田を廻るや金飛脚 同

行年や母健かに我れ病めり 子規

行年の人鈍にして子を得たり 同

松蘿玉液子を祭る

詩百篇君去つて歳行かんとす 同

春待

北窓に春待の梅の老木哉 同

春待や只四五寸の梅の苗 同

年浪

年浪や蟹のあまたの伊勢参 芭蕉

近江路や軒端によする年の浪 蕉村

大晦日

いさや寐ん元日はまたあすのこと 同

風風て麥の仕度や大三十日 同

小照

大三十日愚なり元日猶愚なり 子規

地理

冬の山

めぐり来る雨に音なし冬の山 蕉村

、狼に迷はて越えけり冬の山 子規

山眠

みちのく名所のうち猫山 芭蕉

山は猫眠はいてや雪のひま 芭蕉

水酒

石かれて水しほめるや冬もなし 同

冬田

真直ぐに富士迄ゆかん冬田かな 子規

家めぐる冬田の水の寒さかな 同

地租増徴

此邊にも税の増したる冬田かな 同

ながくと冬田に低し雁の列 同

駒込の阪を下れば冬田かな 同

汽車道の一段高さ冬田かな 同

蜜柑剥いて皮を投げ込む冬田哉 同

道哲の裏を過ぐれば冬田かな 同

行きくして本所離るゝ冬田哉 同



きぬくの大門出れば冬田哉 子規  
身を投げて蠢死なんとす冬田哉 同

冬の川

冬川や誰が引すてし赤蕪 蕪村  
冬川や佛の花の流れ来る 同  
冬川や孤村の犬の糞を追ふ 同  
冬川や舟に菜洗ふ女あり 同  
水筋は涸れて芥や冬の川 子規  
冬川や魚の群れ居る水たまり 同  
冬川や家鴨四五羽に足らぬ水 同  
冬川に鴨の毛かする芥かな 同

玉川

鮎死んで瀬の細りけり冬の川 同  
冬川の菜屑啄む家鴨かな 同  
冬川に捨てたる犬の屍かな 同  
冬川の砂とる土手の普請かな 同  
冬木立 同

この村の人は猿なり冬木立 蕪村  
鴛鴦に美を盡してや冬木立 同  
冬木立月に隣を忘れけり 同  
みよし野やもろこしかけて冬木立 同  
里古りて江の鳥白し冬木立 同  
乾鮭ものぼるけしきや冬木立 同  
冬木立家居ゆかしき麓哉 同

二村に質屋一軒冬木立 同  
斧入て香に驚くや冬木立 同  
門前のすぐに阪なり冬木立 子規  
鳥歸る冬の林の塔暮れたり 同  
冬木立煙のたぬ小村かな 同  
棒杭や四つ街道の冬木立 同  
村もなし只冬木立まばらなり 同  
めらくと燃ゆる伽藍や冬木立 同  
馬行くや道灌山の冬木立 同  
絶壁に月かしりけり冬木立 同  
汽車道の一筋長し冬木立 同  
加賀殿の御屋敷跡や冬木立 同  
冬木立五重の塔の聳えけり 同  
岡添や杉の木まじり冬木立 同  
菜畑や小村をめぐる冬木立 同  
其中に境の柵や冬木立 同  
四辻や東芝山冬木立 同  
家二軒畑つくりけり冬木立 同  
寺ありて小料理屋もあり冬木立 同

枯野

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る 芭蕉  
馬ほくく我を繪に見る枯野哉 同  
眞直に道あらはれて枯野かな 蕪村  
大とこの糞ひりおはす枯野かな 同

夏野哉



石に詩を題してすぐる枯野哉 燕村  
 山を越す人にわかれて枯野かな 同  
 てらくと石に日の照る枯野かな 同  
 蕭條として石に日の入る枯野哉 同  
 三日月も鬩にかかりて枯野かな 同  
 ひさびさの小鳥はみ居る枯野かな 同  
 島にもならず悲しき枯野かな 同  
 馬の尾に茨のかゝる枯野哉 同  
 子を捨る藪さへなくて枯野かな 同  
 息杖に石の火を見る枯野哉 同  
 野は枯て杉二三本の社かな 子規  
 わらんへの犬抱いて行く枯野かな 同  
 鉦も打たて行くや枯野の小願禮 同  
 夕日負ふ六部脊高き枯野哉 同  
 馬見えて雉子の逃げる枯野哉 同  
 旅人の蜜柑喰ひ行く枯野哉 同  
 人絶て狂女に逢ひし枯野哉 同  
 信長の榎残りて枯野かな 同  
 松杉や枯野の中の不動堂 同  
 一つ家に鉦打鳴らす枯野かな 同  
 足元に青草見ゆる枯野かな 同  
 草鞋薄し枯野の小道ばらと踏む 同  
 乞食の鑊錢拾ふ枯野かな 同  
 三日月や枯野を歸る人と犬 同

金州の城門見ゆる枯野かな 同  
 鳥とんで荷馬驚く枯野かな 同  
 汽車道の此頃出来し枯野哉 同  
 とり巻て人の火を焚く枯野哉 同  
 馬糞もともに焼かる枯野哉 同  
 珍らしく女に逢ひし枯野かな 同  
 めい／＼に松明を持つ枯野哉 同  
 枯野原團子の茶屋もなかりけり 同  
 汽車道に鳩の下りたる枯野哉 同  
 提灯の一つ家に入る枯野かな 同

冬野

雉子つけて歸る一騎や冬の原 同  
 貝塚に石器を拾ふ冬野哉 同

初霜

初霜や菊冷そめる腰の綿 芭蕉  
 初霜やわつらふ鶴を遠く見る 燕村  
 初霜や東ねよせたる菊の花 子規

霜

貧山の笠霜に鳴る聲寒し 芭蕉  
 から／＼と折ふし凄し竹の霜 同  
 土屋四友子を透て鎌倉まで 同  
 虫かる 同  
 霜を踏て跋ひく迄送りけり 同  
 稱田に霜の花見る朝かな 同